



道

求



第壹號

第貳卷

物價郵報三第日六廿月二十年一卅治明
日一回一月每)行發日一月二年八卅治明

求道第貳卷第壹號目次

求道

◎親鸞聖人の人格

◎信仰秘鍵

信仰は内心の革命也

信仰は人をして羈絆を脱せしむ

信心開發

歡喜愛樂

◎トルストイの非戦争論と旅順の陥落

講話

◎信仰圓熟の時機

近角常觀

◎信仰の門戸は唯一のみ

近角常觀

實驗

◎親友藤村操君の死により闇に陥

り終に光に遇ふ

藤原正

◎始めて光明を認めたる時人に與

ふるの書

藤井竟

◎最も要領を得たる信仰

塚本大愚

嘆咏

◎我母に

八風

◎みすがた

白佛

◎心のまゝを

甲之

紹介

◎佛陀之聖訓◎哲學辭典

時報

◎昨年の求道學舎日曜講話及談話會出席人名◎昨年の女子

信仰談話會及出席人名◎昨年の第二求道會講話演題◎第三

求道會開設◎日曜講話演題◎第二求道會講話概要◎表紙書

每日 曜 午前 九時

求道學舎講話

本郷 森川町一番地

毎土曜 午後 二時

第一 求道會

(九段坂) 佛教俱樂部

毎月 最終土曜 午後 六時

第三 求道會

(濱町) 日本橋俱樂部

求道

第貳卷 第壹號

親鸞聖人の人格

文豪レツシングはマルチン、ルーテルを評して曰く、汝、ルーテルよ、偉大なる且つ誤解されたるの人よ、汝は吾人をして傳説の羈絆より脱せしめたり、汝は吾人をして文字の堪ゆ可からざる羈絆より脱せしめたり、汝は遂に汝が學びたりしが如き基督敎即ち基督自身が學びたりしが如き基督敎を吾人に持來せりと、蓋し是れルーテルの眞面目を直寫せし者、實に彼は泰西敎界に於ける唯一の人物也、而して世人或は彼を以て我親鸞聖人に比するものあり、蓋し其形蹟を以て論ずるときは酷だ類似したるものあり、然れども其真相を知るものは頗る比倫を失するを知らむ、吾人をして遠慮なく其所信を斷言せしめむか、親鸞聖人の信念や古今宗派の開祖中第一位に居らむ、蓋し、ルーテルの如きは其歴史上の位置の顯著なるが爲めに、古今耳目の中心となれるのみ、若しルーテルの人格の中心となれる信念と我親鸞聖人の信念とを比較せよ、何人も親鸞聖人の實験の絶對他力にして且つ自然法爾なるに如かざるを知らむ、世人が聖人を以てルーテルと比較する要義は、絶對慈愛の救済と家庭的生活を肇めたるの點たるべし、而して試みに基督敎の立脚地に於て之を斷行すると、佛敎の立脚地に於て之を斷行すると羈絆を脱するの點に於て其難易如何を顧みよ、當時如何にバイブルが加特力化せられたりとするも其中より此の如き見地を得る決して難しとせず、然るに釋尊出家の歴史を有し、無師獨悟の經驗を基とせる佛敎の立脚地に立ちて此の如き破天荒の獨創を得たる、寧ろ不可思議と絶叫せざるべからず、世人或は聖人の宗敎が果して佛敎の眞精神たるや否やを疑ふものあり、若し單に形蹟を以て論ぜば此の如きの疑惑決して怪むべきにあらず、然れども眞個に聖人の實験を味へるものは直ちに佛敎の眞髓を握み出せるを覺らむ、而も聖人毫も其經驗を以て釋尊の歴史に符合せしめむと企つることなし、如何に聖人の面目か素撲殼實一點の斧鑿を

用ゐざるかを知るに足らむ、實に聖人の宗教は實驗其儘也、生れたる其儘也、而して聖人は釋尊を以て自己に同列に置かずして之を彌陀佛の同列に置き、眼中唯一の佛陀あるのみ、是れ後世聖人を亦彌陀佛の同列に置く所以にして之を基督教に比較するに、ルーテルの位置にあらずして寧ろ基督自身の地位に配すべき者、而して宗派上の關係も、ルーテルが教會を改革したるよりも、寧ろ基督が其教會の基礎を築きたるに比較すべき者、吾人が稱して古今宗派開祖中第一位を占むと讃仰するもの、必しも不當の言にあらずる也、近世に於ける歴史家の泰斗ランケ、宗教改革史に筆を採るや、先づ眼光を渾圓球上に放ち十五六世紀の頃、世界到る處宗教界に同一の潮流ありとて印度教、喇嘛教、マホメット教等の改革を列叙して基督教會に論及せり、而して我國獨り既に十三世紀に當りて此の如き偉人の降誕ありて、又東西無比の實驗を創む、吾人何等の幸か聖人が實驗の靈泉に汲むことを得たり、洵に是れ聖人が所謂多生にも遇ひ難く、億劫にも得難き者豈宿縁を慶はざるべけむや、況んや又聖人の遺書教行信證あり、實に是れ聖人の生ける眞面目なる者、七百年の後歴々として聖人の膝下に侍して口づから如來大悲の德音に接し奉るの光榮を得たり、豈亦聞く所を慶び、得る所を嘆ぜざらんや、

古來宗派開祖の人格を仰ぐに或は剛なるあり、柔なるあり、硬なるあり、軟なるあり、而して何れの宗祖も此二者を合せ有すと雖親鸞聖人の如きは極端に兩性質を發揮して、一見調和を得ざるが如き感あり、基督曰く、我は平和を出さんが爲めに來るにあらず、劍を出さんが爲めなり、マホメット劍とコーランとを捧げて曰く、是天國を開くの鍵鑰なりと、ルーテル曰く、假令惡魔の數はウォームス全都の瓦の如く多くとも、予は進むて其地に到るべし、日蓮上人曰く、法華經を捨て、無量壽經等を信せよ、然らば日本國を興ふべしと云ふと雖、法華經を捨つべからず、たとひ父母を殺すと云ふと雖、法華經を捨つべからずと何れも皆偉大なる確信を顯はすの言、吾人は此等の言を耳にする毎に秋霜烈日の想なくむばあらず、釋尊宣はく、怨は怨によりて止むべからず、怨は怨なきによりて止まるべし、常輕菩薩は自己を罵言打擲するの邪人を禮して、深心佛性の崇きを顯示し玉ひ、法然上人流刑に臨みて曰く、齡既に八旬に迫れり、同じ帝畿にありとも長く生きて誰か見む、但し因縁盡さずは何ぞ亦今生の再會なからむ、此時に當りて邊鄙の群類を化せんこと莫大の利生なりと、蓮如上人御一代開書に曰く、常には我が前

にて云はずして、かげに後言云ふとて腹立することなり、我はさやうには存ぜず候ふ、我前にて申しに、かげにてなりとも、我がわるき事を申されよ、聞きて心中をなほすべき由申され候と、何れも慈愛骨に徹するの言、吾人は此等の言を耳にする毎に和氣春風の想なくむばあらず、此の如く宗教家には二面の性質あり、而して此二面は其宗派の何たるを問はず、苟も宗教家たる者は、一個人の上に必ず兼備ふるを發見せむ、然れども、其人格の如何によりて一方に偏するを免かれず、マホメット若くは日蓮上人の如きは極端に剛を顯はせるものにして、孔夫子、法然上人の如きは極端に柔を顯はせる者たらずむばあらず、然るに我親鸞に至りては一人にして兩極端を兼備ふるもの吾人一見して其調和を發見するに苦む、聖人化卷後序に曰く、主上臣下法に背き、義に違し、怒を爲し、怨を結ぶ、之に依て眞宗紹隆の太祖源空法師並に門徒數輩罪科を考へず、猥はしく死罪に科すと、何ぞ其言の嚴峻を極むるや、忽にして曰く、或は僧儀を改め、俗名を賜て遠流に處す、予は其一也、然れば既に僧に非す俗に非す是故に禿の字以て姓とすと、而して自ら之を書して奏聞し、卑謙を極め玉ふ、是實に調和すべからざる兩面なり、吾人を以て之を觀る、前の言若し聖人の眞意ならば後は是偽善の行爲のみ、若し後果して聖人の眞意ならば前の言は是れ氣を遣るの言たらむのみ、此の如き聖人一代の間に常にあらはるゝ矛盾なり、聖人曰く、北の郡に候し善乗坊は親をのり善信をやう／＼にそしり候しかば、ちかづきむつまじくもひ候はて、ちかづけす候ひきと、又其實子善鸞師をも勘當し玉ひけり、此の如き聖人にして又曰く親鸞は弟子一人もたずさふらふ、そのゆへはわがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゞこそ弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり、つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればなる、ことのあるをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば往生すべからざるものなりなんどいふこと不可説なり、如來よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんとまうすにや、かへす／＼もあるべからざることなり、自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと、若し之を常識を以て論ずるときは、此の兩極なる二者の調和は決して了解すべからざる也、然れども、信仰を以て論ずるとき初めて鬚髯として聖人の面目を拜し得べき也。

吾人は聖人の信仰を知らむと欲せば先づ佛陀の面目を知らざるべからず、若し佛陀の面目を知らむと欲せば先づ一般に世の教主を知らざるべからず、古今苟も理想を有して一世を教化せむとするの人は其胸裡既に當時世人に卓越して常人の測るべからざる見地を懷抱せること明らか也、孔子陳蔡の野に厄せらるる子路嘆して曰く夫子の道至大にして天下能く容るゝなしと、顔淵曰く容れられずして、而して後、君子を見ると、洵に至言と謂ふべし、其言ふ所、其行ふ所、當時俗流の見る所と同じくして、徒に世人の稱讃を博するが如きは寧ろ哲人が耻づる所、世人の容るゝ能はざる所は是世人の窺ひ知るべからざる或者を有するが爲ならむか、若し孔子の如く、孟子の如く、退て徐ろに之を筆して百代に遺すも或は可ならむ、然れども若し強て其理想を以て直ちに現實界に實行せむと企てむか、ソクラテスの如く、獄中毒を仰きて瞑し、基督の如く迫害の慘劇を受ける寧ろ其所なり、而して吾人此等偉人の胸底を察するに此の如き厄難を蒙りて身を捧ぐるは寧ろ偉人の本意たるべし、ソクラテス其弟子の共に逃れむことを請へるに拘はらず、之を拒み、從容として國法の下に斃る、彼は彼の爲すべきとを爲し終りたるの満足をして瞑目したりしならむ、基督エダの譏する所となりて磔せらる、然れども一世は猶此の如く我言を信ぜざる也、嘗に信ぜざるのみならず、猶之を害せむとす、然れども我其迫害の爲めに斃るゝは即我理想の奪ふべからざるを示すもの却て是理想の勝利也、吾人は其教を信ぜずと雖、彼が迫害の鎗を受くるときは如何に彼が満足たりしかを想像して餘りあり、而して我大聖釋尊に至りては、内心の實驗に於て八萬四千の惡魔を降伏し、遂に八萬四千の光明を放ち、絶對無限の大悲を以て、衆生をして又同一佛陀の光明に接せしめむと欲する是釋尊一代の教化に非ずや、故に釋尊の本領は人をして自覺せしめ玉ふにあり、若し人をして自覺せしめむが爲ならむか、如何なる困苦も亦辭し玉ふ所に非る也、自ら道を得れば嘗て己と捨て去りし五比丘を追ひて道に入らしめ、耶舎を化しては直ちに五十五人の富豪を感化し、故郷に歸りては直ちに父を化し、妻を化し、子を化し、弟を化し、乃至王族より下人民に至るまで皆感化を蒙らざるべなし、而して遂に王舎城に於ける一大慘劇は佛陀の慈愛が如何に無限なるかを顯示し玉ひし事實也、韋提希夫人獄中に幽閉せられて煩悶の極、佛陀の來臨を請ひ、五體を地に投じて求哀懺悔し、遂に攝取の光明に接し、阿闍世王深く自己の罪惡を感じて一大惱亂に陥り、最後に至りて悶絶僻地して遂に佛所に詣ず、佛陀無限の

慈愛を以て慰藉して曰く、汝若し罪あるべくば我等諸佛も亦罪あるべしと、阿闍世忽ち慈愛骨に徹して叫んで曰く、我衆生の爲めに阿鼻地獄に墮在するも以て苦と爲さずと、以て阿闍世が如何に歡喜の地位に達せしかを知るべし、是實に佛陀の理想の實現せられたる者、佛陀は其理想を知らざるの人、理想に達せざる世に達して決して奮闘的態度を取らず、寧ろ同化的感化的態度を取り玉ひし也、是實に佛陀の理想なるもの、他の教祖が其信仰に殉し、其時代より遁るゝもの多きに拘はらず、佛陀は最後に之を同化し去りて圓滿の結果を治め來る、是絶對の眞價を實現したるものにして、佛陀獨り八十の高齡を全ふし圓寂の境に達し玉ふ所以也、是實に釋尊自身が佛陀の大慈を示し玉ひしものにして、嘗に現世に於て然るのみならず、永劫の昔より本生譚に於て示し玉ひし佛陀無限の慈愛は、吾人衆生をして飽まで自覺せしめむとする行爲にして、佛陀は畢竟、慈悲の結晶、矜哀の凝結たらざるはなし、而して親戀聖人は其佛陀の根元、慈悲の源泉たる絶對大悲の彌陀佛の大誓願と大修行に向て、直到に其信念を傾け玉ひしもの、吾人は聖人の胸中に宿り玉ひし佛陀を味ひ奉りて胸中無限の感にうたるゝもの也、夫れ彌陀佛の誓願や至大也、十方三世の苦惱の衆生を救済し、永劫の昔より盡未來際の終に至るまで、すべて罪惡の徒をして悉く同一佛陀慈光の下に同化し了せむと玉ふ也、而して此誓願や、實に至大超世の本願にして遠く三世諸佛の所願を包容す、何ぞ夫れ大なる、既に曰く十方の諸佛吞嗟して我が名を稱せずば正覺を取らじと、嗚呼三世十方の佛陀異口同音に其德を讚嘆し玉ひ、あらゆる衆生之を聞きて歡喜愛樂の念を生ず、豈是佛陀理想の最上にあらずや、而して十方衆生を攝取して、遂に絶對無限の樂土に到らしめ、靜寂涅槃の境に遊はしめむとす、而して此の如き偉大なる理想を實現するが爲めに、不可思議兆載、永劫の修行あり、其間一念一刹那も清淨ならざるなく、眞實ならざるなく、居常和顏愛語にして意を先にして承問し玉ひ、少欲知足にして染患痴なし、麁言にして自ら害し、彼を害し、彼此共に害するを遠離し、善語にして自ら利し、人を利し、人と我と兼利することを修習し玉へり、此の如く無央數劫に功を積み徳を累ねて遂に現時救済の大事を成就し玉へり、嗚呼是れ偉大なる慈愛にあらずや、佛陀は此の如き大慈矜哀の心を起して無限の苦を嘗め、絶對の愛を垂れ玉ふ、我を害せむとするものに對して之を慈み、我を誘ふものに對して之を憐み、我を知らざるものに對して之を悟らしめ、我慈悲に叛きて彼地獄に走らむ

とするものに對して種々の方便を以て、引接せむと企て玉ふ、嗚呼佛陀の心や遂に知るべからず、如來は一切の爲めに常に慈父母となり玉へり、當さに知るべし諸の衆生は皆是如來の子也、世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修し玉ふこと人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し、嗚呼衆生は煩惱の爲めに苦しめらるること恰も鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如く、而して佛陀之を觀そなはして救済に力を用る玉ふこと、亦鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し、吾人常に佛陀は慈悲也との德音に接するや油然として感謝の涙に堪へず、其慈悲たるや觀念にあらず、言語にあらず、唯是事實也、假令身を諸の苦毒の中に終るとも我行精進にして忍びて終に悔なすと、嗚呼偉大なる事實にあらずや、而して此の如き善本、此の如きの徳本、攝して一佛名字の中に在り、耳に聞き、口に誦するに無邊の聖徳識心に攬入し玉ふ、豈是不可思議の事實にあらずや、稱して誓願不思議と呼はむか、名けて名號不思議と言はむか、唯不思議と信じつる上はとかくの御計ひあるべからず候、吾人は遂に言ふ所を知らず、唯眞如一實の功徳寶海と云ふべきのみ、涅槃經に曰く、實諦は一道清淨にして二あることなしと、華嚴經に曰く、法王は唯一法なり、一切無碍人一道より生死を出てたまへり、皆是不可思議境、不可思議力、不可思議の功徳を説き玉へるものにして三世十方の諸佛の來遊し玉へる理想海たらざるはなし、實に是れ久遠より已來、凡聖修するところの難修難善の川水を轉じ、逆謗闡提、恒沙無明の海水を轉じ、本願大悲智慧眞實恒沙萬徳の大寶海水たらしめ玉ふ、是實に親鸞聖人の心中に宿り玉ふ佛陀にあらずや。

此の如きは親鸞聖人の生命として聖人が拜し玉ひし佛陀也、吾人は如何に崇高にして且廣大なるかに驚かずむばあらず、而して聖人は此の如き廣大なる佛陀の慈悲に打たる、と同時に、聖人の頭上に響き來りし思想は即絕對の罪惡觀也、吾人は信卷を開きて阿闍世王が苦悶の文を見る毎に、未だ嘗て聖人の實驗に想ひ到らずむばあらず、吾人は涅槃經に於ける彼文字は到底通常人が着眼し得べからざるものにして、吾人幾度之を反復すと雖、一々の文字活躍して實驗の味盡さざるものあるを覺ふ、而して此の如き文字に着眼し得るの人は必ず深遠沈痛なる實驗を経たること明らかなり、而して聖人先づ簡單にして切實なる懺悔を捧げて曰く、悲哉愚癡愛慾の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快ま

ず、耻づべし、傷むべしと、文字沈痛にして懺悔骨に徹す、而して此文字を冠せしめて引用し來りたるは實に彼涅槃經の文字也、而して之を結びて曰く、之を以て今大聖の眞説によるに、難化の三機難治の三病は、大悲弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば之を矜哀して治し、之を憐憫して療じ玉ふ、たとへば醍醐の妙藥の一切の病を療するが如しと、嗚呼是慈愛骨に徹するの言にあらずや、蓋し王舎城の悲劇は世人常に之を口にするが爲に、耳するものと稍薄きを覺ふ、然れども詳かに其事實の大體を察せよ、王舎城の大王頻婆沙羅は實に慈愛深くして人民を撫育し、特に佛陀を信じ奉ること最も篤し、而して此の如き惡子阿闍世王あり、佛陀の感化印度に普及すること數十年、釋尊の教團將に理想に達せんと欲して忽ちにして提婆達多あり、實に是れ悲むべきの事にあらずや、眞個に是れ人世の有様にあらずや、吾人は親鸞聖人の一世を觀察し奉るに、此の如き提婆阿闍世の逆惡は實に二千年前の事實にあらずして、眼前の事實にあらずや、南都北嶺の僧侶、先師法然聖人及御弟子を誣奏して、直ちに念佛門に向て大迫害を下し、猥りに死罪流罪に處せらる、是即ち聖人が喝破して、至上臣下法に背き義に違し怒を成し、怨を結ぶと斷言し玉ひし所、提婆阿闍世の再現にあらずや、吾人は當年を想像して悲哀の涙なき能はざる也、法然聖人此時にあたりて從容として却て傳道的機會を得たるを喜びたまひしこと前に記すが如し、且法然聖人私かに其敵を憐みて曰く、但痛むところは源空興する淨土の法門は濁世衆生の決定出離の要道なるが故に守護の天等定て冥暎をいたさんか、もししからは貧道が流罪弟子が斬刑、かくのごときの前代未聞こと常篇に絶たり、因果のむなしからざること、いきて世に住せばもひあはずべきなりと云云、嗚呼法然聖人の眼中敵なく、怨なし、唯敵の爲めに其眞罰を恐るゝの心頗る剴切也、親鸞聖人は亦曰く、大師聖人若し流刑に處せられ玉はずは我亦配所に赴んや、若し我配所に赴かざれば何によりてか邊鄙の群類を化せん、是猶師教の恩致也と、又曰く、此法を信する衆生もあり、謗る衆生もあるべしと佛とをかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありてそしるにて佛説まことなりけりとしられさふらふ、しかれば往生はいよく一定ともひたまふべきなりと、眼中唯佛陀の金言あるのみ、此に至りて佛陀無限の大慈は長へに聖人の人格を通して逆謗闡提の上と照し玉ふ、嗚呼大なる哉。已上は是れ親鸞聖人が極端なる強剛なる確信を顯はし、又極端なる柔和なる同化力を示し玉ふ所以にして畢竟自ら阿闍世王

の苦悶を實驗し、提婆誑法の大災厄に遭遇して、結局佛陀無限の慈悲を實驗し玉ひしに淵源せずばならず、嗚呼親鸞聖人は眞個に佛陀大慈の權化也、如來大悲の示現也、而して既に阿闍世を以て自ら居る、是聖人か信仰の特色也、當代一世を擧げて聖人を誹謗す、毫も聖人を煩はすに足らざる也、何んとなれば聖人自ら罪惡の極を自覺す、何ぞ初めて人を待ちて後之を知らむや、然れども聖人既に佛陀の恩寵を蒙る至大、天下擧て非議するも何ぞ人の毀譽によりて其確信を二三にするものならむや、此に至りて唯存するものは佛陀無限の恩徳也、他の善と云ひ惡と云ふもの皆佛陀絶対の光を認めずして是非するのみ、聖人曰く、まことに如來の御恩と云ふことをは沙汰なくして、我も人も善し惡しといふことをのみ常に申しあへりと云云、人生不幸を見て悲み、悲劇を見て嘆ず、何ぞ知らむ、皆是れ如來大悲の慈光を顯はし來る恩寵ならざるはなし、見よ彼の念佛迫害師弟流刑の事は皆是彌陀大悲の光明を現代に赫し來る事實ならざるはなし、此に於てや親鸞聖人教行信證總序に先づ絶対佛陀の慈愛を掲げて曰く、竊かに以みれば難思の弘誓は難度海を度するの大船、無碍の光明は無明の闇を破するの慧日なりと、而して直ちに提婆阿闍世の事實を擧げ來りて曰、然則淨邦綠熟して調達闍世をして逆害を興さしめ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選はしめ玉へり、是則權化の仁齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲、正しく逆誘闍提を惠まむと欲すと、教行信證の結文に曰く若し此書を見聞せんものは信順を因とし、疑謗を縁として信樂を願力にあらはし妙果を安養にあらはさん、華嚴經の偈に云ふか如し、若し菩薩種々の行を修行するを見て善不善の心を起すと雖、菩薩皆攝取すと、廣潤海の如きにあらずや、嗚呼是れ聖人が信仰の眼目也、實驗の眞髓也、而して是れ聖人が人格の眞面目たらずむばならず、吾人は漸次聖人の聖教、家庭、すべての方面に於て聖人が戒律の羈絆を脱し、文字の羈絆を脱し、一世に卓立し、萬代を感化し玉へる聖人の高風を鑽仰し奉らむことを期するもの也。

信仰秘鍵

信仰は内心の革命也

信仰の状態や絶対也、而も其絶対や言語にあらず、觀念にあらず、又本體にあらず、唯是内心に實驗するの事實也、恰も是雷電忽ち閃めきて一撃の下、屋上より床下まで貫き去りて、一點の餘塵を存せざるが如きのみ、眞個に是れ絶対的事實、遂に之を味はずむば之を知る能はざる也、吾人常に稱して内心の革命といふ、罪惡苦悶の我、一轉して清淨歡喜の人となる、是豈斧鑿開墾人力を以て耕し得たるの境ならむや、佛陀經文に説き玉ふ所皆悉く事實たらざるはなし、大無量壽經に曰、若し三途勤苦の處にありて此光明を見たてまつれば皆休息することを得て亦苦惱なげむ、壽終りての後皆解脱を蒙ると、是文字の如く吾人が實驗せる事實也、嗚呼昨日の苦惱一點の光なかりき、何を自ら此の如き光を發するを得む、今日の歡喜一點の曇なし、何ぞ昨の苦を奪去るの極まれるや、豈是絶対的事實にあらずや。

信仰は人をして羈絆を脱せしむ

既に絶対の境に達す、遂に捕捉すべからざる也、信仰の眼中には唯佛陀あり、人間なし、信仰の世界には唯光明あり、暗黒なし、吾人固より肉の身體を保ち、人生の境界に寓する限りは人間なきにあらず、暗黒なきにあらず、然れども我亦人間の、一たるを知らば何ぞ他に人間の存在を怪まむ、我亦暗黒の、一塊たるを悟らば却て大悲光明の益々清らかなるを感ぜむ、信仰の眼中唯吾人と佛陀あるのみ、世界固より人間あり、暗黒あり、然れども吾人之が爲めに、少しも抵抗を感ぜざる也、之が爲に少しも羈絆せらるることなし、若し之が爲に抵抗なく羈絆せらるることなくむば是既に人間なき也、既に暗黒なき也、否寧ろ人間の存在するは却て佛陀の崇高を示し玉ふ所以にして暗黒の來るは光明の威神を顯はすが爲ならざるを知らむや、

信樂開發

龍樹大士曰く、若人善根を種へて、疑へは花開かず、信心清淨なれば花開て佛を見奉ると、嗚呼心華の開く遂に思議すべからず、況んや心眼了々佛陀を見奉るに於てをや、花未だ開かざるや既に開けるの境を知るべからず、既に開けるの後含華未出の境茫として昨夢の如し、人夢に在るや醒覺を知るべからず、之を想像するたも是夢也、而して醒覺の人にとりては夢も亦是醒覺中の一幻影のみ、一瞬前の夢忽ち一瞬の後醒覺となる、是絶對なる所革命なる所、稱して一念といふ、親鸞聖人曰く、一念とは信樂開發の時刻の極促を顯はすと。

歡喜愛樂

大悲の光明は吾人を照して長へに信心歡喜せしめ玉ふ、信仰の水に飲むものは人生の渴を醫することを得む、佛陀は吾人の中にあるか、抑々亦外にあるか、源信和尚曰く、煩惱眼を障へて、見奉らずと雖、大悲憐むことなくして常に我を照し玉ふと。信仰の光に接するものは期せざる所自ら路を開き、求めざるに法爾として與へらる、同じく是人世、信なきの人は死せる世界也。信あるの人は生命ある世界也、同じく是社會、信なきの人は殘害殺戮の世界也、信あるの人は歡喜愛樂の世界なり、曇鸞大師の曰く、四海の中兄弟也同一に念佛して別の道なきが故に、嗚呼世の憂へるものを歡ばしむべく、悲めるものをして喜ばしむべく、苦めるものを愛せしむべく、惱めるものを樂はしむべし、憂悲苦惱の世界は一轉して歡喜愛樂の世界たらしむべし。

トルストイの非戰爭論と

旅順の陥落

今日は帝國首府に於て旅順陥落祝賀會の舉行されつゝあるの日也、吾人は吾人の見地に立ちて此偉大なる出來事に對する宗教的意義を發表せむとす。

回顧せば予が「トルストイ伯其信仰」と題する一文を草したるは實に一昨年五月なりき、爾後日露戰爭起り、又トルストイ伯の日露戰爭論草せられ、諸家の批評紛々たりき、而して吾人は開戰當時既に以爲らく、兵は固より兇器にして戰爭の非宗教的行爲たる言ふを待たずと雖、是人生に於ける一出來事たる已上は必ずや之が爲めに人生の自覺を促して宗教上大の意義を持來すこと必然なりと、(昨年求道第二號及信仰問題序)而して昨年八月予信州傳道の際旅順戰爭に於て初めて一萬の人命を殞したるの報に接したるの時慨然として以爲嗚呼此の如きの多大の血を以て購はむとするもの金錢か土地か權利か果た戰勝の名譽なるか、否々此等己上のより大なる或者の存せざるの理あらむや、是必ずや深遠なる意義のあるありて特に佛天の吾人人類の上に下し玉ひし訓戒たらざらむやと、忽にして潜然涙雨の如く下りて禁する能はざりき、當時恰もトルストイの日露戰爭論出で、其批評紛々たる時なりしが、予はトルストイの論も其批評の何れにも満足を表する能はざりき、而して日露戰爭の眼目とも謂つべき旅順の攻守

は今や一段落を看け、開城落着、兩將會見、露都の震撼、乃木將軍及戰死軍人の家庭、歐洲諸新聞の論調等一々閲し來りて、吾人は感慨措く能はざるものあり、蓋し此大なる出來事に對して、政治家は政治家の見地に立ち、實業家は實業の見地に立ち、軍人は軍事の見地に立ちて各見る所あるべし、吾人亦宗教の見地に立ちて、其所懷を披瀝せむと欲する也。

トルストイの信仰は頗る簡單也、曰く無抵抗主義是也、惡を咎むる勿れ、罪を寛容せよ、唯果して能く實行せらるべきや否や、是れ問題也、トルストイの戰爭を非認せる、理想として一言の挾むべき餘地あるを見ず、人として誰か生命を吝まざらむ、又平和を欲せざらむ、然れども未だ自覺せざるの生命、表面姑息の平和は果して人生をして安んぜしむるを得べきや、世人動もすれば戰爭を以て直に平和の手段の如く辯護するは是口實也、強辯也、吾人は全然トルストイと同じく以爲是れ罪惡也と而して是れ人生の弱點也、苦悶也、而して人によりて人生の價値の如何なるかを悟りて佛陀の光明に接することを得る也、故に戰爭を以て平和の手段の如く謳歌するは不可なるべしと雖、罪惡なるが故に之を爲す勿れと強ゆる丈にては人生不可能のことなるべし、恰も是れ苦悶する人に對して若悶する勿れと誡め、罪惡の人に對して徒らに自ら償はむことを強ゆるが如し、何人と雖好んで苦悶するものはなけれども、信仰に入る前には苦悶して遂に自覺に入る如く、現代の如き不眞面目なる世界は此の如き極端なる出來事に遇ひて人生に對して眞面目なる思想を起し來る也、故に無戰爭は理想としては固に可也、然れども直に之を人生に強ゆるは

未だ人生を解せざるの言也。故にトルストイの言は理想として洵に可也。吾人直ちに採りて行ふべき宗教としては不可能也、世人切にトルストイの説を賛するもの多し、其言に曰く、トルストイの言ふ所宗教家の言として確かに價値ありと、其言の裏面には一般には行はれ難しとの意味歟、蓋し此の如きは宗教家は特に不可能の理想を標榜して、世人をして少しにても之に近からしむる標本を示すものなりとの謂ならむか、此の如き宗教は或は一服の清涼劑一ヒの防腐劑たるの價値あるべし、是トルストイも服し、帝王も服し、官吏も服し、労働者も貧人も服するを得べき健全なる滋養分とは言ひ得べからざる也、吾人は戦争を是認せむとするものにあらず、吾人は其避くべからざるを知ると共に、其避くべからざる事實によりて人生を自覺せしめ、之によりて輝き来る光明を仰ぐべき也。

トルストイ常に曰く神の意志を行へと洵に理想的の言語也、若し吾人神の意志の如く行ふを得たらむには吾人既に神たるなり、吾人若し神たるを得たらむには人生豈宗教の存在を認むるを要せむや、吾人斷して曰く、トルストイは決して神の力によりて行へと勸むるに非ず、神たれと勸むるもの也、恰も是れ佛教に於て自力聖道門に於て自ら佛たらむと企つるが如きもの、未だ眞個に佛陀の力を認めたるもの、言にあらざる也、吾人はトルストイの言の理想として頗る正確たるを認むると同時に如何にして此戦争の中に理想を實現するかを攻究せむと欲する也。

吾人をして其所信を披瀝せしめむか、曰く戦争の経験によ

れと、ブラーマダッタ王、後日に至り、復大軍を興して來り攻む、ヂルゲーチ謂らく、我既に彼に勝てり、何ぞ復勝つに足らん、あはれ、鬭争は奇なるかな、悪なるかな、我彼に勝てば彼復我に勝んとし、我彼に害を加ふれば、彼復我に害を加へんとす、彼の欲するは我國土にあり、國土の爲の故に、いかで彼我の民衆を殘ふべきとて其國を敵の手に渡して、遠く遁れ、諸方を流浪して遂にペナレスに來りて陶器師として、其夫人と共に平安なる生活を送りたりき。夫人、男兒を誕生せり。名けてヂルカーユといふ、彼生長したるの後父王以爲らく、ブラーマダッタ王は其復讐を謀らむことを恐れて、我等三人を發見して殺戮し去らむことを欲すること明かなりと、乃ち其子を他に遁れしめ其難を避けしめたり。此時既にヂルガーユは十分なる教育を受け、學問技藝通せざるはなかりき。

此時ヂルゲーチの理髮人ペナレスに住せしが、其舊主を賣りて之をブラーマダッタに訴へたり。彼直ちに逮捕し處刑せむとす。

ヂルゲーチ捕へられて、ペナレスの町を通るとき、彼は其父母を見舞はむとて歸り來る其兒を見。捕吏の爲めに其子たることを悟られむことを恐れつゝ、空を仰ぎ獨語して最後の遺言を通じて曰く、「我兒ヂルガーユよ、長く視され、短く視され、如何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりてのみ、息めらるべし」と。

コーサラ王は彼の妻と共に所刑せらる。ヂルガーユは強き酒を買ひ來りて番兵を酔倒せしめ、纏て夜となりし時、彼

りて敵も味方も大なる自覺を生ずべき也、何人も認むる如く若し道理を以て論ぜば曲彼に在るべし、然れども最後の平和を來すべき手段は必しも戦に在らずして自覺に在り、吾人をして極言せしめむか、若し自覺を生ぜずんば、たとひ戦はずと雖、人世最終の平和を來すこと能はざるべし、若し自覺を生ぜんか、戦争固より不祥なりと雖自然の趨勢之を経るにあらずんば平和に達すること能はざる也、然らば自覺とは如何、曰く絶對の光明を認むることなり、是トルストイの理想として追ふが如きものにあらずして千古吾人の上に臨み玉へる生命ある絶對の力を認むる也、而して吾人は此力によりて行動し、初めて平和に達すべき也、是實に個人信仰上の問題に於ても實驗する所にして社會上の事情に於ても同一の經過の免るべからざるを認むる也。

吾人は嘗てトルストイ及其信仰を論じたるときトルストイの無抵抗主義は佛陀の理想と同一のものなりと言ひて引用したる本生譚は頗る趣味津津たるものにして、殊に恰も日露戦争の真相を穿てるが如き感あり、吾人は便宜の爲めに再ひ之を引用せんか曰く

佛陀の教團に争鬭起りたる時、佛陀其弟子に對して過去の本生を説きて曰く

嘗てペナレスに於てカーシーのブラーマダッタと名くる力強き王在せり、彼コーサラ國の王ヂルゲーチに向て大軍を興して臨みしかばヂルゲーチ之を邀へ、之を打破りて、ブラーマダッタ王を擒したり、既にして之を放ちて曰く、汝窮厄の人、死生我手中に在り、されど今汝を教さん、後復作す

は積み重さねられたる薪の上に兩親の屍を横へ尊敬と宗教の儀式とを以て之を火にす。

ブラーマダッタ王之を聞いて畏れを抱けり。何となればヂルゲーチの子ヂルガーユは、彼の兩親の死に對して復讐せんと欲し、好機を見て彼を暗殺せんと考へたればなり。年若きヂルガーユは深林に往きて心ゆくまで泣きたるが、やがて涙押し拂ひてペナレスに歸れり。茲に彼は王の象小屋に助手の入用なるとをき、採用せられんことを請ひ、象小屋の主によりて雇はるゝとを得たり。時に王は彼の心を樂ましめんが爲めに、夜をこめて微妙なる音楽と笛の音につるゝ歌をきかんことを欲するにあたり。彼の臣下の中に此の唱ひ手を求めたるが、象小屋の主は其配下に年若き上手のものありて、同僚の間に愛せらるゝものあるを告ぐ。彼等は彼に語るに笛に合せて唱歌し以て王の心を樂しましめんが爲めに唱ひ手と成らむことを以てせり。

茲に王は此若ものを呼出したるが、少なからず王の心に叶ひ、王城の内に採用することとせり。若もの、機敏なる働きと職務の執行に嚴正なるを見たる王は、遂に彼を侍臣の列に加ふるに至りぬ。

或時王は狩に出て従者と相失し、獨りヂルガーユと相對せしが王は狩の疲れに堪へざりけん、ヂルガーユの膝を枕として眠れり。

こゝにヂルガーユは考へぬ。此王ブラーマダッタは吾々に大害を興へ、吾等の王國を奪ひ、吾兩親を殺せり。而して彼の運命はかゝりて吾掌中にありと。かく考へつゝ、彼は彼の

佩劍を抜き放ちしが、其時彼は急に「長く視され、短く視され、如何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりてのみ息めらるべし」との、彼か父の今はの際に残したる遺言を想ひ浮べたるを以て、再び劍を鞘に收めぬ。

王は眠安すからざるを感して目覚めぬ。若ものは「王よ何故に驚き玉ふか」と問へり。王答ふらく、「予の眠は若きデルガニーが劍を提げて吾に向ひ来るを夢みるか爲めに、常に安すからざるなり。今予が茲に汝の膝を枕として眠るにあたり、再び畏るべき夢に襲はれ、恐怖と驚きとを以てかくは目覚めたるなり」と。

爰に若ものは彼の左手に王の危害を防ぐに由なき首を捕へて、右手に劍をぬきて叫ぶらく、「余は汝の爲めに其王國を奪はれ、我母なる彼の妻と共に戮せられたるデルゲーデ王の子デルガニーなり、今や復讐の時は来れり」と。

王はデルガニーのあはれみを請ひつゝ、彼の手を舉げていふやう、願くは我命を許せ、願くは我命を許せ、我親愛なるデルガニーよと。

デルガニーは悪意なく云へり。王よ余は如何にして王を許すの力あらむや。却て我生命は汝の爲めに危くせられたるに非ずや。王よ我命を許さざるべからざるは却て汝にあらざるや、と。

王また云へり、「さらば親愛なるデルガニーよ、汝は先づ我命を許せ。然らばわれまた汝の命を許さん」と。かくてカーシーの王ブラーマダッタと若きデルガニーとは

達したりし事實を擧げ玉ひしは頗る興味あることなり、當時吾人が之に附記して「此の如き原始佛教が圓熟醇化の極に達したる現時の信仰論に至りては他日之を論ぜん」と云ひしもの實に如何にして自覺し遂に理想を實現するかの問題たりしなり、

讀者は直ちにカーシーのブラーマダッタが如何に露國の國是に似たるかを悟らむ、而して得たる勝利を平和の爲めに敵に捧げしは如何に當年の遼東還附に似たる、ブラーマダッタ猶再びコサラの國を奪ふ、何ぞ旅順の租地に似たる、而して猶進むて害を加ふ彼が朝鮮に手を附くるに似たる、デルカ

ニーたるもの復仇の念を起す、固より其所也、十年の臥薪嘗膽、劍を敵の咽喉に加ふ、實に最後の一撃旅順を屠らむとするに似たり、幸にして開城條約成り不幸の生靈を救ふを得たり、露國たるもの確かに其非を悔悟すべきの時期たらずむはあらず、而して我國亦猛省すべき也、蓋し旅順は日露戦争の争點也、大勢既に定まる、前途既に春風和蕙の氣あり、吾人は世界平和の爲めに、遂にコサラ、カーシー兩國の如き大自覺の結果を見むことを望む、蓋し、政治、實業、國際各種の見地に立ちて論議多々あるべしと雖、吾人言ふ所の宗教なるものは、殊に宗教家のみ特有するものを言ふにあらざりて人生の眞意、萬古の眞理なる者、内心深く「怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりて息めらるべければ也」の金言を體せむことを望む者也

親鸞聖人は提婆阿闍世の悲劇は人生の上に佛陀無限の大悲を顯現せりと觀じ玉ふ、吾人亦斷言せんと欲す日露戦争は我

互に其命を許し、手に手をととりて今後互に害せざるべきことを誓ひり。

ブラーマダッタ王は、若きデルガニーに云ひけるよう。汝の父は將に死せんとする時、何故に長く視され、短く視され、如何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりて息めらるべしと云ひしか。そも汝の父は之によりて何を意味せしかと。

若ものは答へて云ひけるよ。王よ、我父は將に死せんとする時、長く視されと云ひしは、汝の妬みをして永く續かざらしめんことを意味し、短く視されと云ひしは、汝の友と争を急ぐことなかれと云ふを意味せり。何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりてのみ息めらるべければとの意なりしなればなり。王よ、汝は我兩親を殺せり。吾若し汝の命を絶たば汝の黨與また我命を絶つべし。而してまた我黨與は汝の黨與の命を絶つべし。斯くて怨に次くに怨を以てし何の時か怨の果つべき時あらんや然ども今汝は我命を許し、我亦汝の命を許せり、かくて怨なきによりて怨みは鎮むることを得べきなりと。

茲に、カーシー王ブラーマダッタは想へり、若きデルガニーは其父の言葉をかかまて精細に解し盡したることの賢さよ是に於て王は彼に還すに彼の父の軍隊と輜重と領土と財寶と倉庫とを以てし、且つ彼女を彼に婚嫁せしめたりと。

此說話は佛陀が闢論の不可を誡め玉ひしものにして、要は唯當初の争はざるの可なるを示し玉ふものたらずむはあらず、然れ共偶然にも其說話の結構が屢戰を實驗して、終に自覺に

日本國を自覺せしめ、進みて彼露國を覺他せしめ、二十世紀の舞臺に於て世界の大平和を來すの序幕たらずむはあらず、吾人は幾萬の生靈の注ぎたる羶血が單に土地、權力、物質的所得の爲めに捧げられたらむには實に千古の恨事ならずむはあらず、吾人は旅順の陥落に際して宗教的見地に立ちて兩國民が一大自覺に達せんことを望む。

講話

信仰圓熟の時機

(求道學舎日曜講話)

近角 常 觀

近頃屢々自然法爾と云ふことを御話して居りました。信仰の最後の境は自然法爾の上によくあらはれるのである、結果は皆自然法爾である。自分でどんな結果をもち來たすと言ても、人間の力では人生總ての事柄は出來る事は一つもないのである。皆是如來の力である。これをのぞきては何もないのである。その極をいひ表はしたのが自然法爾と言ふのである。十二月の求道にも言ふて置きましたから度々重複しますが親鸞聖人の晩年の傳道が皆この自然法爾である。聖人の晩年になる程自然法爾になつて居る。正像末和讚の終りに親鸞八十八歳御筆とある、これが最後の書きものである。して見ると正

像末和讃の最後の獲得章自然章の二章は聖人最後の書きものである。それから末燈鈔の中にも自然法爾の事をいはれてある、全くこれと同様である。自然法爾といふ事は何遍も何遍も言ふてもその味深くして限がないのである。今も亦この事を味はしてもらいたいと思ふ。自然と言へばあたり前のこと石が墮ちる、花が咲く、鳥が歌ふ、その獨りでの様子が自然であるから、その言葉は全く拳の入りぬ自然法爾である。その最もあたり前と言ふ事が、絶對の力がその中にあらはれて居るのである。世界の事が當り前當り前と言ふは相對的の當り前、石は沈むべきものだ、然るに石が浮いた九死の病人がたすかつた、こら不思議だと言ふ、その事ばかりが不思議なればとて不思議と言ふけれども、世界の事を見るにそんなささいな事ではない。つくづく考れば人生の事悉く不思議の力ならざるはなしである。當り前の事がつくづく考ると非常に偉大なる力がこもつて居る。石が下に落ちるそれは引付けの力あるからだ、非常なる力があるからである、人生をつくづく考へるにその偉大なる佛力、佛の光に接するのが長い過程であつた、腹が立つ、うらむ、にくむ、その現象はその道行は大なる佛の光に接するやうにあちらこちらさまよふので、人生の總ては佛の力である、或るものは佛力で他のものはそうでないと言ふ可からず、人生總ての事に於て佛の偉大なる力があらはれて居るのである。通常の當り前と云ふ事が佛の力にひきつけられて居るのである。佛陀の他力、他力の極、絶對の力をあらはし來る極、その何とも言ふて見やうのないところを自然法爾と言はれたのである。その様子は末燈

ると、わからぬやうになる。法爾かと思ふと自然で、文字からして連絡がない。渾然として環の端なきが如く、聖人自ら自然法爾の靈境を實驗し、信仰の靈筆を以てかゝれたるものである。一々つまらぬ解釋するよりは、朗讀すると味がつくさ

れぬものでありまして、同一の信仰に入られた味は今も十年前も、老人の信仰も、圓熟の人の信仰も皆一つです。一口に言へば、天上から床の下までぶちぬいた思ひになるのである。大願清淨の報土には、品位階次を問はず。更に程度はなし、弟子もなければ師匠もなく、御同朋御同行である。齊しくこれ絶對の信仰を味ひその靈境を味ふるに至る。その味は人生の經驗の度毎に深まる、程度あるものではない。私は親鸞聖人が慕はしい。宗派の感情でなく親鸞聖人とあれば難有い。私は常に聖人の信仰の味ひはこゝだこゝだと諸君に言ふて居ました。前よりは後、前よりは後と味が深くなる。前に言ふた事が淺く、親鸞聖人の味が確に是れと言ふてよいかどうか、そのぶちぬけた味は聖人二十九歳より九十歳に至るも同じ事であるが、その悟後の味が、大に考へなければならぬと思ふ。聖人が自然の事を言はれてから、その態度がカツキリ變る。かの自然法爾の文字に於て、佛の大なる力があらはれるが、先づ第一に自然とは吾人の心の上に信仰を得まして後からは行かぬ、こちらに眞面目にその信仰通り飽までといふていかぬ。然るに無理のない所に自然に行はれるを感ず、自分の信ずる所を以て世の中に行はんと思ふて居れば何時かは自然に行はれる。かくの如き若輩が、數年の間に見せてもら

鈔に「自然といふは自は、をのつからといふ。行者の、はからひにあらず。然といふは、しからしむといふことはなり。

しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如來の、ちかひにて、あるかゆへに、法爾といふ。法爾といふは、この如來の、御ちかひなるかゆへに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひ、なりけるゆへに、をよそ行者のはからひのなきをもて、この法の徳のゆへに、しからしむといふなり。すべてひとの、はじめはからはざるなり。このゆへに、義なきを義とすと、しるべしとなり。自然といふはもとよりしからしむることはなり。彌陀佛の、御ちかひのものとより、行者の、はからひにあらずして、南無阿彌陀佛と、たのませたまひてむかへんと、はからせたまひたるによりて、行者の、よからんと、あしからんと、おもはぬを、自然とはまふすと、さしてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんと、ちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもありません。かたちもましますまぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちもましますまぬゆへには、無上涅槃とは、まふさす。かたちもましますまぬやうをしらせんとて、はしめて、彌陀佛と、まふすと、さしならひて、さふらふ。彌陀佛は自然のやうを、しらせん、れうなり。この道理をこゝろをつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすと、いふことは、なを義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなるべしと。

これが自然法爾の言ひ方である。之を理屈がましく解釋す

た經驗によりて、種々味はしてもらふのに、聖人滿九十年の間、佛陀の偉大なる力を味ひ味ひゆかれて、晩年は全く自然法爾の生活を送られたのである。

今日の講話の題は信仰圓熟の時機と出して置きまして、近頃學舎に起りました事實を言ふてしまひたい、あつた通りを御話して見やう。私が求道學舎を始めまして、茲にあしかけ三年、即ち二年餘の間、日曜毎に講話をして居りますが、第一自分の行ひが現今なども一寸も思ふ通りに行きませぬ。講話の方は自分もしい、聞く人もそのつもりであるから、二時間の間佛の御話を御話して諸君もむなく家へ歸へられぬ。で講話の現象は兩方ともよい方面を言ひまた聞いてもらふ。併して、て話す通り、又こゝで聞く通り日々行ふ事が出來ぬ。共同生活はこの二三年の間繼いでやつても思ふ様に行かぬ。大分話が荒くなるが、決して人を不足に思はぬ。私は學舎を經營する資格がない。人の缺點が目につくなれば全体此様なことをせぬがよい。もとより金の爲めにあらず、又餘裕があるのでもない。やつて居ると言ふて何をやつて居るか、意味がない、到底出來ぬ。今迄から思ふた事は度々あつて、この學舎を辭職しやうかと度々思ふたのである。人がどうちやからと言ふよりも自分がどうしても行かぬ。むかしの私の性質は人に日夜附いて居てもすゝめるのであつたが、此學舎に入りてから自然法爾的となつて、始めてこの學舎へ御入りになつた方に對しても一所に御飯をたべたりする外に、別に御話する事も少ない。然るに漸々種々の經驗を重ねる結局、朝は皆よつて佛前に御禮を上げるやうになつた。その時は必

ず歎異鈔を二章宛四人で読み、次に御文を読み、それから一同朝飯をたべるのである。歎異鈔を読んで御座る諸君に意味がわかるかと思ふと、それがどうなり行くか分らぬ。かくやつて行くうち、この學年よりして學舎の趣が變つて來た。それはこれ迄自力でやり通すと言ふて居つた人が、絶對他力の信仰に入つたり、又種々苦しんで居られた人が偉大なる安慰を得られたり、仰げば大悲の光がその人にふりかけられ、蘭射の香ひが外の人にうつると言ふ有様である。今日の重なる題は十二月十五日の夜の事でした。私は今は家を隣へ移したので、諸君がさみしいと言はれるから、それはいかぬ、一週に二度位集つて話をうと言ふと、それでは今から始めやうといふ事になつた。その時は夜の九時頃であつたが、學舎の人のみ集りまして、自然法爾の御話をして居るうち、何の話か漸々話して居るうち、皆愉快がつて居る。そのうちに一人苦んで居る人があつて、其人がうるさくて聞いて居られぬから御免を蒙ると言ふて忙はしく座を立つて行かれたが、残りのものは皆話をして、私も信仰を得る以前にあつた苦悶の事、則ち今より八年前の昔の事など話して行くうちに、この以前談話をしたとき、萩野君が信仰を得るには罪惡觀があつてもなくてもよいとの話があつた、そのとき後の方から罪惡觀がないものは宗教の信仰ぢやないと言ふた人があつたが、そのとき萩野君はさういふあの人が信仰の經驗のある人かと私に話された事があつた。そのときの罪惡がなければ云々と言はれた方が、その晩は眞面目に自分の事を言ひ出される。そこで私は、實はこの間の談話會のとき、君は萩野君の話に

對して罪惡がなければ云々と言はれたが、そのとき萩野君はこうこうと、私は皆しやべつてしまつた。不遠慮に私は言ふたにもかゝらず、その人はか言はるゝには私は世人は無情であつても佛様許りは愛して下さると思ふて心を抑へて居ると言はれた、ソコで私は罪惡は自分より外に人はない、外の人の事は目につけてはならぬとこう言ひました。そこで私の積年の日記、苦悶當時のかきものなどを見せて種々話をして居ると夜も段々ふけてくる。所が先程うるさいから聞かれぬと言ふて、出て行つた人が、又出て來て、入つてもよろしいかと言はれたから、さあれ入りなさいと言ふと、その人の言はれるのに、先程こゝを出て、假名聖教とバイブルを携えて佛間へ往きました、ふと歎異鈔を出して、一彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、と讀むと如何にも有難い、一各十餘箇國のさかひをこえて身命をかへりみずして、難有い、一善人なを以て往生す況んや惡人をや、實に難有御座います、一慈悲聖道淨土のかはりめあり、一親鸞は父母の孝養のためとて念佛一返にても、まうしたることいまださふらはず等、一々歎異鈔の一章を讀んで難有實に難有御座りますと、その人は非常に喜ばれた。その時の私の感じは何とも言ひえぬ。長々の間無意味に讀んで居られたし、又自分も無理におしつけに言ふて居つたに、今やかく喜ばれる。その澤山の本の中で、歎異鈔が目について、非常にそれが難有とは、どういふ事てさうなつたのか。釋尊は阿彌陀經に、舍利弗我利を見るが故に、此言を説くとあるが、其時私は何とも言ふに言えぬ感にうたれ、遂にかすかに聲を放ちました。

そこに居つた六七人、一時に號叫した、殊にかの罪惡觀につきて云云した人が、聲を上げてしやうがない。二三人部屋を出て歸られた。こんな時は理屈をいふはねそひと思ひ、直ちに佛前に出て、感謝の爲め歎異鈔を始めから回り讀みをしました。夜一時過ぎになつた。皆喜はしてもらふて歸られました。それから家のもののみ三時過まで話をして居つたが、彼聲をあげた人が戸の外に來て又明日御目にかゝると言ふて歸られた、あくる日例の如く佛前で歎異鈔を讀む。そのとき其聲をあげた人が讀み出しかけてないで讀めない、皆感じた、私もどういふ事か不思議でならん。罪惡がなければ宗教がないなど言ふた人が、嗚呼何もかも私があるかつたと聲を上げてなきふしてしまはれる。唯偉大なる佛陀の慈愛である、誰れも同じ事であると言ふて、手をとつてよろこびました。それからその人は外に行くときも珠數を手にし、口に稱念念佛して、昨日になつて實にうれしうれしうれしてたまらぬ。脚が蒼空について歩くやうである。又口に念佛は絶えぬ。遂に今日の講話になつたのである。何を以て、何の爲にか、之を説明する事の出来るものでない。全く自然法爾である(此時先生感極まつて物言ふを得ず歎泣泣之を久ふす一座感動唯啜泣歎歎の聲のみ座に堪はずして室を出づる人あり)

佛の偉大なる力は人間のわかるものでない。人間の力で出来るものでない。佛の廣大なる力は、親鸞聖人の言はるゝ如く自然法爾の力である。かく事實に見る事が、どう考へても佛の力はわからぬ。自然法爾の御力にてよろしきやうに計らはれる。信心開發の極、不思議の極が自然法爾である、私は

今日に於て断言してよろしい。始めてこう言ふ人が出來かけ、學舎中に向ふても信仰談、こちらでも信仰論、自然にさういふ工合になつて下さる。學舎は自分の力では出來ぬ、廣大の力なければこそ學舎もやらしてもらひました。佛様の御心は自然法爾である。學舎について味はしてもらひました。文殊子利發願經に雖隨順世間業、不捨菩薩道、盡未來際劫、具修普賢行、若有同行者、願常集一處、とありましたからこれを見まして學舎の意味はさうでなければならぬ、これが學舎の理想と思ふて居ましたが、今事實に於て見るのである。猶進んで自然法爾の事を御話させう。その自然法爾の最終はどこか、偉大なる自然法爾であるが、もう一つ高き所は、吾々が死んだ後に來る靈境である。自然の極度はこの肉の終りたるところ、人生最終の極致、五欲の軀を捨て、自然虛無の身無極の軀これこそ極致である。死と言ふもの敢て恐るに足らず、宗教の極は肉のなくなつたる境界、明鏡の境ひ、自然の本當の味はそこに在る。自然とは如此佛の廣大なる境である。彼のこれのと區別はなく、無爲涅槃界、極樂常住の境である。自然法爾章の後半は確かに其意味である。佛の廣大なる引力にひかれて落つる如く引よせられる。唯南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、最後の最後は行者のはからひにあらず、行者のよからむともあしからむともれぬを、自然とは申ぞとさうしてさうろふ。さうしてさうやつて引つけられた極は、無上佛にならしめんとあかひたまへるなり、かたちもましますさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とまますぞとさうならひてさうろふ、彌陀佛

は自然のやうをしらせんれうなり。この世にうれいとかか
なしいとか言ふては、未だ自然の極に達せぬのである。
先程申す如く偉大なる力にて彌陀佛は出来た、なせ出来たか、
一に吾々如きものを引入れん爲めになり。世界通しての最大
理想である。四大海水が一時に海に入つて一味の平等になる
如く、その最後の理想界に引入れん爲めに、彌陀如来となり
給ひ、あらゆる人生をしてこの境に入れしめん爲めにこの自
然をしらせん爲めに、この彌陀佛とあらはれ給ふたのである。
一度この境に入りぬればまたこの世に還相回向して普賢の徳
を行ずるに至る。

「久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛
としてぞ、伽耶城には應現する」、これを還相回向と言ふこ
の大理想界こそ本當の絶對界である。この世に於ては戦争も
する、敵も味方も遂にはこの至樂の境に入つて、再び煩惱の
林に遊び、生死の藪に入つて應化を示す、蘭林遊戯の境に來
る。これ全く自然の極致、如来すなはち涅槃なり、涅槃を佛
性となつたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりて
證すべし、此肉の體をすて、極樂淨土に至つて始めて涅槃の
の至樂を味ふのである。この自然のことは、つねにさたすべ
きにあらざるなり、つねに自然をさたせば、義なきを義とす
といふことは、なを義のあるにさすべし」と、こうすべしあ
いすべしなど言ふときは猶義のある事となる、その計らひ
なきに自然に引よせられてゆくのである。この無義の義は法
然上人が常に仰せられた、これは全く佛教の不思議である。
全く彌陀の大悲大願の不思議にたすけられて、みづからの計

信仰の門戸は唯一

あるのみ

(第二求道會土曜講話)

近角 常觀

今日は本年の初回であります。私は毎年續いて此會を開か
して貰ひますのを喜んで居ります。何うか皆様も年の改まる
と共に益熱心に御聞を願ひ度い。道を求むる人は年を逐ふて
盛んの様であります。然し求道の盛と申すのは人數の増す
といふのではなく、少くとも眞面目なるをいふのでありま
す。今迄は本郷では第一、當俱樂部では第二、又其中に日本橋
邊に第三の求道會をも開かうと存して居ります。そこで本郷
では私か從來實驗致しました信仰の最も奥深い處を話し、此
處では人か信仰に入るには如何にすべきかといふ事について
話し、日本橋の方では處柄でもあれば、月に一回重に社會上の
方面から御話致さうと存して居ります。然し本郷も九段も月
々四回も開く事でありませれば何れも同じ事になるかも知れ
ぬが大体の主意はかう致すつもりであります。

扱今日の題は門戸は唯一あるのみ、これは信仰を求むる上
には最も必要な事でありませぬ。昨年は一度信仰の門戸と堂奥
といふ事を御話致しました、總て信仰は人生の如何なる方面
よりも入るので古來佛教には八萬四千の法門ありと申しま
す。然し門戸は別々であるか其堂奥たる絶對佛の慈愛とい

ひをまじはらざるを言ふのである。誓願の不思議を信じて
まつれば、名號の不思議も満足して、誓願名號の不思議ひと
つにしてさらにことなることなきなり」と、全く如来の計
ひにまかすにより他力には義なきを義とすとある。親鸞聖人
晩年のね書きものうち、玉日姫にあて、唯何事も御はから
ひなく如来に御まかせ玉ふべく候、他力には義なきを義とす
と申候なり、よくよく御心得候べし穴賢々々」とある、又聖
人の御女、彌女様の御言葉に、「師父聖人の御言に、自然の御
事、彌陀佛の御誓のものとより、行者のはからひにあらざして南
無阿彌陀佛とたのませ玉ひて迎えんとはからはせ玉ひたるに
よつて、行者のよからんともあしからんとも思はぬを、自然
とは申すぞと聞て候との御教、身の毛いよ立ちてありかた
く覺を候」と又聖人御往生の三日前に、「超世の悲願さしより、
われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨
土にすみ遊ぶ」と。これ實に自然の極致、信仰圓熟の境であ
る、今日は學舎と言ふ上に信仰の圓熟の機が來た事を言ひま
した。たゞありやうに御話を申しこの學舎講話と對して學舎
生活の上に佛の御力を感ぜさしてもらふたその感謝の意を表
する爲めに、自然法爾の御話をしたのであります。

* * * * *

ふ處になると皆同一である。八萬四千の門戸といふもつまり
人間の數丈け門戸はるのである、念佛を稱へて佛の慈悲に
入る、或は座禪をして佛心を見る、或は自ら奮勵して如何にも
して善となし、人の爲に善くせんと勤むるに中々思ふ通に行
かず、遂に己が力の可弱さを知りて佛に入る、又多年の間罪惡
を犯し重ねたる人が一朝自覺の期に達し佛の慈悲に入り、或
は内心に湧き來る苦痛煩悶の抑へ難く其極遂に人生の秘奥を
洞觀して全く佛の慈愛に接し、或は生れて直ぐに宗教の家庭
に生ひ立ち何時となく至極平安に遂に信仰に入るもあり、如
斯其門戸は各異りて居ても遂には皆等しく佛の慈愛に向て
引きつけらるゝのである。つまり信仰の味は唯一つである信
仰にして若し己が力、己が智恵によりて得らるゝものならば
人々其面の異なる如く異りて居るであらう。然し信仰は決し
てそんなものではない。人々が眞實佛の慈悲に感泣する時は
我力、我智恵、我經驗は總て益にたぬ、信仰の味は唯一で
ある。故に眞實に法に入るべき道は澤山あれども歸する處は
唯、難有といふ一つである。つまり總ての門戸は唯一佛陀
慈愛の堂奥に導くのである。そこで此考て今日の門戸は唯一
あるのみといふ題を見ると一寸反對の様であるが其實毫もち
がはぬ。其故は佛教に入る門戸は種々あるも己が入るべき最
後の門は唯一なりといふ意味である。今日は其門戸に入る心
持態度に於て御話して見ようと思ふ。

先づ道禪禪師は佛教の門戸を大に別ちて聖道、淨土の二門
とせられたが、茲に大なる味がある。聖道門は佛の教を佛が
其ま、佛の境遇を顯はされたもの、淨土門は佛の教を其儘修

する事の出来ない人間の爲に開かれたる易行の門である。前に申しました八萬四千の多くの門は皆是聖道門、難行自力の門である。淨土門は禪師の語にある如く、唯有淨土一門可通入路、聖道門其數多しと雖も我等は到底是等の門を通ずべからず、こは立派なる聖者の爲の門であつて、我等の如く内心常に煩惱の爲に覆はれて居る者が戒律杯とは思ひもよらぬ、如何に門戸は多くとも通ずべき門戸は一つもない。昔話に巧な大工が家を建てた處が、行けば入口が皆閉ぢて遂に入る事が出来なかつたといふが、我等が聖道門に對しては其通りである。然るに淨土、佛陀慈愛の一門のみは通入する事が出来て、初めて安心させて貰ふ事が出来る。此門は理屈や議論で通入するに非ず、全く信仰である。佛陀の慈悲に接するに躊躇を嫌ふ、驀直前進初めて能く門戸を通入すべきである。人が眞實に窮境に陥る時は四面悉く閉塞せられる、茲に於て如何ぞ門の多きを要せんや、唯一門さへ開かるればそれでよいのである。先づ此室に入らんとするに、假令入口が四方にあるにせよ、一人の人が入るに四方の口より同時に入る事は出来ぬ、入る時は全く一路である、宗教の事に於て殊に此感がある。私の實驗によるも人生の事種々に企て、やろうとするに一も理想通に行かぬ、己が人に對して同情を求むるに得ず、四面は遂に閉塞し進退全く窮まる、然るに茲に如何なる事が内心に生じ來るかといへば、即佛の慈悲の有り難いといふ事である。世界が眞暗になつて愈輝くものは、佛陀慈愛の光明である。此光明を認むればこそ、我等は初めて悠々人生行路の難を排して進んで行けるのである。信仰を得たからと

も、唯一つ、陛下に對する誠忠があるからである。人生の事總て唯一佛陀の光をながめて行けばこそ千辛萬苦を冒してもやつと行けるのである。故に、假令、屍を戰場に曝すとも、皆同一佛陀の攝護を蒙るのである、文殊の一法は即念佛無碍の一道、一佛に歸するは即一切佛に歸するなり、八萬四千の法門も遂に佛陀慈愛の一門に歸して、堂奥に達せしむるのである。華嚴では一即一切といつて、一つを知れば即一切を知るのであるといふが、信仰の一つさて知れば、人生一切の事が知られる。親鸞聖人の如きは、佛を見るに決して二佛を并べられないで、唯彌陀一佛を立てられる、此宗旨を一向宗といふも其意である。故に聖人は他佛に心を懸くるもの、悉く雜行雜修として眞實門とはせられなかつた、是實に信仰は眞一文字に進むべきものである事を知らしめられたものである。これで信仰は一門一道でなければならぬといふ事を御話致しました。これよりは其門に入るべき心持を話して見ましよう。扱實驗の上より見れば信仰の一門一道でなければならぬといふ事は自ら解る。試に信仰を開かうとか、試に座禪をやつて見ようとかといふ様に、試にやるといふ位では未だ、餘程餘裕がある。處が眞個に求道の念が起つた時は、そんな手ぬるいやり方では堪へられぬ。そうなるに實際門は澤山ない、門が澤山ある位ならさのみ苦しませぬ。眞宗門がなくなる、否一もない様になる。實際こゝに至らねば一門の味は解らない。私の實驗に據れば、學校時代にも佛教の會杯をやつて居て、講習會も開いて各宗の御話も聞きました、然し本來私の性質として多くの道を試るといふ事が出来なかつた、私の考へては、

いふて悪が善に苦が樂に變じてしまふかといへば決してそうでない、若し變るといふならばそら間違ひである。實に信仰の心持が鐵鑛の間に金塊を見つけ、土壤の中に清泉を發見す、是れ實に人間の量るべからざる佛陀の慈悲に據るのである。くどい様であるが、假令世界が倒になつても此慈悲さへあれば我等は如何なる苦境に陥ろうが一旦死に落ち付いた以上は、安心して進む事が出来る、これ信仰以後の喜の生ずる處である。闇極まりて光を見る、信仰の味はこゝである。これで信仰の門戸は唯一つであるといふ意味は能く知られたてでありましよう、此一つといふ事が、餘程味があるのて、此味が眞に味へれば、已に光明の中に入りたる人といへよう。種々御經を見ますのに、一つといふ事が能く出てある、度々申す歎異鈔には、念佛は無碍の一道なりとある、又華嚴經には、文殊の法は常に爾なり、法王は唯一法なり、一切無碍人は一道より生死を出て玉へり、一切諸佛の身は唯是一法身なり、一心一智恵なり、力無畏も亦然りと。多くの人が悟を得らる、時には、皆一道よりせられる、法王は唯一のみ、其法王の一法ありて生死を出づるを得玉へり、是即一無碍道である。これを親鸞聖人の見地より見て、念佛は無碍の一道なりといはれたのである。佛を稱念するといふも、唯一佛を稱念するのである。佛教に十方恒沙の諸佛といふも、皆等しく、此一佛に歸する、此一佛即本師法王の阿彌陀佛、即絶對の佛陀である、私は此間哲學館の眞宗同志會の人から頼まれて軍人の慰問袋の中に、此佛陀に對する一無碍道といふ事を書いてやりました。今や我國幾十萬の兵士が遼東の野に血潮を流して戦ふの

試みに座禪をやる、試にする程のものが何の悟が開けよう、己は他力によりて安心して居るものである、他力を信するものなれば最早座禪をやる必要もない、忠臣は二君に仕へす貞女は二夫を并べずと、武士道を重んずる武士は我主君の爲には決して身命を顧みない、又婦人が己の主人に貞操を立つるとなれば、決して二人の男子に見えない。人生に於て己に如斯、況や信仰の上には是非一道でなければならぬ。一方では他力、一方では自力、そんな事か何うして出來よう、故に私は他力でやろうと思ふ上は試に自力をやろうとは思はなかつた。處が私が人生上に實際苦しみ初めてから以來といふものは、是迄安心したと思つて居たのがすつかり駄目になつた、實に苦しかつた、茲に初めて私は從來の他力を全然抛ちて、座禪に進まんとした、然し幸に友人が引き留めて呉れました爲に今日の身の上にして貰はれました、が其當時は實に意思が弱くなつて、凡そ半年程も苦しんだ最後に髣髴として認め來りしは、佛陀の慈悲でありました、茲に私は全く自己の無能力なる事を知り、他に求むる事の駄目なる事を解して、遂に佛陀の大なる慈悲にすがる身の上となりました。佛陀は私たちの罪惡の如何に係らず、決して見捨て玉ふ事はない、故に私は茲に求道者があつて何れの道を撰ばんかと躊躇するならば、先づ其人の進むべきは唯一道一門なる事を申し度い。其人初めは了解し難きも、更に進んで止まされれば此味は自ら悟り得られる、一道といへばとて人はいはれて、一道になるのてはない。實驗の極、自ら一道でなければいかぬといふ事を自覺するのである。此自覺によりて、門戸を通り、佛陀慈愛

の堂奥に達した喜は最早忘れんとして忘るゝ事は出来ぬ。そうなれば、今の世や末世、釋尊を去る事遠くして、行證は我等の到底及ぶ處に非ず、八萬四千の門戸は悉く塞いて居ても、獨り佛陀慈愛の門のみは開いて我等をば通せしめ玉ふといふ様に感ぜらるゝ。門戸の唯一である事はこれで明になつたであらうと思ふ。

次に申すべき事は此門戸を通ずるは、生涯を通して、唯一度であるといふ事である。歎異鈔に、信心の行者自然に腹をも立て、あしざまなる事をおかし、同朋同侶にもあひて、口論をしては、必ず廻心すべしといふ事、此條斷惡修善の心地か、一向專修の人に於ては、回心といふ事唯一度あるべしとある。一向專修の人は門を通ずる事は唯一度也、而して、此門を通ずる時は親もなく、子もなく、又師もなく唯佛陀の慈愛のみあつて然も大安心が出来、行者が初めて此慈光に接したる時には、嗚呼今迄我はかゝる慈愛の佛のある事を知らなんだといふは如何にもすまなんだと自己を全く抛捨て、佛に歸する、是只一度である。尤も其後とても、己を顧みては佛に歸するのではあるが、こは恰も已に開かれたる溝を、拂除するのと同じ事である。此最初の廻心こそ能く信仰の溝を開鑿するのである。故に信仰の門戸は唯一つて然も其門を通ずるのは唯一度である。尙信仰を得るのは丁度火薬に火を點ずると同じく、一度火を點ずればそれでしまひである。度々申す如く信仰は内心の革命なり、根本的のやさなほしてある、つまり一度佛に接せし上は、再び舊に歸する事はない。今迄は事變の起る度毎に、周章奮ならざりし者が、信仰の後

は人生上何か起りて来ようが、さのみ驚かぬこれ迄は信仰の門は唯一つであつて、然も其門戸を通るは唯一邊であるといふ事を御話致しました。

此よりは信仰以後の状態に就て御話して見ましよう。信後の人は誰でも總ての事が皆佛様の御手廻ぢやと申すからして、信前の人迄も成程然う思はねばならぬのかと苦しむ人もある様である。然しこれは、實際門戸を通つた後に知れる事であつて、そう思はなければならぬとか、かうせねばならぬとかといふ様に、信仰は決してそんな窮屈なものではない。又信仰は理屈がましき議論がましきものではない、そんなものは唯一時のものである。人生の事若し信念よりせざる時に於ては自らを欺くものである。一旦、佛の慈愛を蒙り、門戸を通りぬけて来た心持は、我が過去の事は總て我をして今日あらしむる爲に偉大なる佛陀の御手廻してあつたといふ感謝の情である。若し病氣が信仰に入る縁となつた人ならば病氣あつてこそと思ふであらうし、又他人と融和する事が出来ぬ爲に苦しんで居た人ならば、其人あつてこそと思ふであらう尙一步を進むれば、從來融和し能はざりし當人が大善知識とも思はれて更りて慕はしき人となるであらう。親鸞聖人が和讃に大聖各もろともに、凡愚底下の罪人を、逆惡もらさぬ誓願に方便引入せしめけりと仰せられたのは、彼の阿闍世の逆惡も信仰の爲には大因縁となる事を知らしめられたのである。これ實に信仰として最味のある處である。而して信仰後は自らかうなるのである。此間から申上げて居る信仰の實例も皆此通りになつて居る。然るに信仰前の人少し窮すと

きにこれも佛の御手廻しと落ち附け様と思ふても、そは暫くの間で到底長續はせぬ。つまり信後の人生觀は自ら來るのである。人生の總ての事が、佛あればこそ〜と思ふのである、一寸した事より佛の慈悲を思ふのが、總ての方面に擴大して行く、己が親も佛を信する迄は單に人生上の親とのみ見て居たのが、やがては永劫の親と思はるゝ様になる。即我親は佛の大親の顯はれてあると思ふ様になる、一杯の水にも大悲を感ずる。斯くの如き人生觀は佛陀の慈愛に接觸したる後に非れば到底知る事は出来ぬ。長い間御話を致しましたが、これを要するに下の三段に歸するのであります。一、信仰の門戸は唯一あるのみ。二、門戸を通入するは唯一回あるのみ。三、信後の人生觀は悉く佛陀の恩籠なり。

實 驗

親友藤村操君の死により
闇に陥り終に光に遇ふ

近角先生足下。我がさきに人生の迷執に追はれて、悲哀暗黒の淵に沈淪致し居り候時に當りて、深く狂愚を憫み、懇篤に熱實に訓誨を加へられたる御憐愍の程、誠に〜に感佩の至りに御座候。今に至りて當時を追懷致し候へば、實に神怪

不可思議の感に堪へ申さず、こゝに既往の心事を告白して、悉く懺悔仕るべく候。

小生郷里の中學に在りし頃は好んで新佛敎を愛讀致し居り候。其の痛快に舊佛敎の虚禮と迷信とを駁撃し、宗敎は哲學的ならざるべからず、科學的ならざるべからずと主張する所、最も我が意を得たるものに候ひき。其後三十三年の末に上京致し、京北中學に在學致し居り候頃、文明堂の店頭にて表紙の觸體が氣に入りて、精神界の二號を購讀致せること有之候も、絶對他力の信仰を鼓吹して、極めて無氣力に消極的に、眞宗信者の愚夫愚婦の言に似たる所、當時の我が新佛敎的頭腦を喜ばすべき何等の内容も之なく、從て爾後數月の間は精神界を手にせることも之なく候ひき。秋に至りて偶々人の清澤先生を語るを耳にし、同先生は精神主義の唱導者にして、當時森川町の浩浩洞に講話の席を開かれ居る由を聞き、半ば、其人格の慕はしきより、半ば、好奇心より、十月初旬の雨をば〜と降れる日曜日始めて先生の温容に接し、講話を拜聽致し候ふに。其風丰端嚴にして、一言一句生命の迸る所、思はず我をして肅然崇敎の念を起さしめ、爾來殆んど毎週來聽致し候。始めの程は其所説の極端なるに驚きたるのみに候ひしも、漸次幾分か其意の存する所を了解致し、此なる哉、此なる哉、さきの新佛敎の言ふ所の如きはこれ壯士の空言のみ、人生の指針は此主義を措きてまた他に求むべからずと、早吞込に合點致し、精神主義者を以て自ら任じ居り候。されど先生多年の内的實驗の結晶せる、苦辛慘憺の餘になれる同主義を、暫時客觀的に考案せる我の何とて其真相に體達し得

らるべき、假構の佛陀は忽ち影を失ひ、中心の悲鳴深く聞ゆること毎々に候ひしかど、日曜毎に先生に接し、漸く壞れかゝれる信仰を補綴して維持致し居り候。三十五年九月、第一高等學校に入學して、寄宿生活を營み候ひしより、學校の價値が預期に反して、貧少なることも亦不平の一原因を増加致し、加ふるに清澤先生も、東京を去りて病を故山に養はれたるにより、遂に先生に接するの機も之なく、我が内界の動搖日々に其度を進め、衷心日に非に、儼々の生を送り居り候折柄、同級の藤村操君と京北中學の同窓會にて語を交へ、互に憂を同じうするものなるを知り、爾後何となく彼のなつかしく、時々小石川新諏訪町なる彼れが宅を音づれて、語り暮せる時之有り、漸次彼我の秘密も概ね包まぬ様に相成り、學校にて十分休憩の時間も、手をとりに語りざれば何となく物足らぬ心地致し、放課後は大抵共に上野あたりに散歩致し候。時には闇を冒して田端、道灌山、早稲田、護國寺邊まで、逍遙致し、或は星夜の莊嚴を談じ、或は月夜の美觀を説き、或は天地の崇美に打たれ、共に快哉を叫んで、快活に笑語せし折も之有り候得共、多くは彼も悲を告げ、我も苦を訴へ、ん世徒に若惱の巷にして遂に無意義に終るものに非るなきかを語り、はては互に言葉なく、唯手を握りて太息を漏せるのみもの度も々に候ひき。一夜京北中學の後なる淋しき徑を通れる折、彼は往來安全の瓦斯燈の角に輝けるを眩し、何よりも闇を愛すと語りたることもあり。又は雨をぼく／＼と降りかけたる夜の九時頃、四隣聲なき護國寺畔の墓地をさまよへる折柄、俄に木の葉のがさ／＼と風に音せるに、我手をと

に啓かる。嗚呼此月此日、君は此の山川、靈ある日光の山中、此の唯一乗の華嚴の瀧に永劫の眼りに就き給へるか。君が眠れる瀧壺の底には、浮世の苦悶なからむ。俗世の僻幽なからむ。常寂の床の上には平安長しなへに破るゝの時なからむ。

さあれ君よ。友に後れて殘敗の餘生に惱める我は、今此巖頭に立ちて、悲泣雨涙、仰いて天に哭し、俯して地に慟するも、幽明杳として消息の傳ふべきなし。山川靈なきか、草木情なきか、飛瀑天上より落ちて空しく此恨を洗はんとす。嗚呼何等の無情ぞ。禍なる哉華嚴の瀧よ。我友を殺せる華嚴の瀧よ。此水長しなへに濁れよ。此岸長く花なかれ。と之有り候。山を下りつゝ、泣き、悲み、悶々候、彼れの在る所は常に我のある所、彼なき所に我あるの理なしと考へ。彼れの今更に慕はしく、なつかしく、如何にしても彼死せりとは思はれず。今にも忽ち眼前に顯はれ來らん心地して、道側の樹蔭、叢中に彼の隠れ居たらん様に思はれ申候。

二十五日歸京致し候へ共、人に接すること最も堪へ難く、毎日寄宿の寢室に終日籠り居り候。常に見ゆるものは華嚴の光景と、聞ゆるものは華嚴の瀑聲のみに候ひき。彼の死に對する當時の感慨は、五月二十九日の夜に書せる帛文に表はれ居り候へば、左に數節抜萃致し候。

嗚呼君よ。終始君が腦裡に往來せるは、宇宙人生其の物に對する疑問にして、君が胸中の煩悶も亦實に絶對相對の争闘に外ならざりしなり。而して君の眞摯と激性とを以てして、如何で這般の問題を等閑に附し得べき。苦悶は、日々

て淋しと言ひしこともあり。又は傳道院側の稻荷神社の前なる坂を登りつゝ、セルフの有無、死後の境界等を語れる間に、突然我肩を打ちて、君は自殺し得るやと問ひ、我は未だ能はずと答へたるに、彼悄然頭を垂れて考に沈みたる折も之有り、又は上野東照宮の前なる林中にて、罕なる星を仰ぎつゝ、人生問題とは到底解決し得べからざるものに非るなきかを嘆じたるの末、彼は「願くは悶えに悶えわれ死なむれつに覺りてすまむよりは。」と口吟し、これ我が辭世なり、宜しく記憶せよと言ふに、何事か二三語我が擲論せしこともありしを記憶致し居り候。如斯我は彼によりて多大の慰藉を見出し居り候處、越て三十六年五月二十二日、彼は獨り華嚴の瀧に投じて、我のみ此世に残され申候。此れ誠に我が空前の大打撃、雷電風雨一時に來りて、我を襲ふも、此時の驚駭痛嘆に比すれば、更に／＼僅少ならむと信じ候。彼れの華嚴に投ぜんとするの報を得るや、生死未だ明ならざるに先ちて、我は日光に趣き候も、時既に後く、彼れが遺せる巖頭の感を読み、彼れが投ぜる巖頭に登りて、直下六十丈、泡沫飛散、雨と飛び雲と散る華嚴の大瀑を瞰下せる我が心中、何卒／＼御推察なし被下度候。當時の記事に、

巖頭に上りてこれを臨む。六十幾丈の大瀑足下に懸り、響蕪々として九天にとどろき、泡沫飛散、白波沸き立つ瀧壺を眼下に瞳下ろし、岩に激し、石に躍れる、下流をのぞみ。兩岸懸崖斬るが如く。新緑滴らむとして殘んの櫻花なほ鮮なり。實にこれ好個の霞光土、溪聲悉く廣長舌、山色清淨身に非るはなし。造化の聖意こゝに現はれ。自然の默示こ

に加はり、闘争漸く烈しく、自己を投じて絶對に歸入するか、絶對を捲いて、自己に歸入せしむるに非ずむば、到底君の堪へ得ざる所。相對變轉の郷は、決して君が永遠の住家には非ざりしなり。絶對其物に非るよりは、帝王の冠も、サタンの劔も、到底君を留むるに由なかりしなり。玆に於てか一切を否定して、常住不變唯一絶對の境に入る。狭き死の一途あるのみ(中略)萬有の真相は長へに不可解なるべきか。自然の秘論は遂に啓くに由なきか。曰く否、叩くものは開かれ。求むるものは與へられ、君が迷搜憂悶も、遂に究竟する所、其解決を與へられしに非るか。巖頭之感の後半を讀みて、然か信ぜざるを得ざるなり。煩悶と平和とは容るゝに由なく、悲觀と樂觀とは兩立し得へからず。然るに「既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安」なかりし君は慥かに煩悶の惡魔を降伏して、懽幽の繫縛を解脱せられしに非るか。悲觀と樂觀との一致する所、其所に善なく悪なく、天なく人なく、我彼に入るか、彼我に入るか、一理流行、究竟暢達、無碍無礙、天真獨朗の境に逍遙せられ、究竟大安の域に臻られしにはあらざるか。(下略)

又故友の性格を追懐しては

嗚呼君よ。君は眞摯の人なりき。理想の人なりき。勢利功名は君の鄙視して止まざる所、苟且安を偷み、身を俗流に投じて、汝々者流と群をなし、方便主義に醜觀せんは到底君の堪え得ざる所。不羈自由、獨立獨歩は君の理想にして、また君自身にてありしなり。他人の批評を意に介せず、斷々乎として己の欲する所に順はれしが如きは、其高調決し

て塵寰の人には非りしなり。

天資聰明、意志鞏固なる君は、また決して無妄に非しなり。
 (中畧)其事を處するに緻密なる、其學を修るに篤實なる、
 (中畧)實に天心清明の人なりき。

家庭朋友に優なりし君は、また自然の特愛者なりしなり。
 親しく自然に接し、天然の聖容を觀ずるは、君の最も好ま
 れし所。(中畧)自然詩人として、陶淵明とマールゾーズと
 を取られ、「山静如太古」、「Kalmie never betrayed who loved
 her」等は君の最も愛吟せられし所のものなりき。

と、思慕の情、汪汪湧出致し、彼を失ひたる悲哀の感は益々
 激して、狂瀾怒濤の如く、我がかつて有せりと思惟せる主義
 も、理想も、神佛も、人我一切根底の根底より打破せられ、
 君に後れて人生の重荷を負ひ、疲れ果てたる敗殘の生涯を
 續けざるべからざる予は何を目的として進むべき。朝露の
 人命、幾何時か鮮なるべき。何れの時か果して大安の境に
 到り得べき。陰府の暗坑は醜き口を開きて、日夜待ちつゝ、
 あるに非ずや。戦さながらも浮世を迫る所以のものは、此
 世の執着と、他界の種種との存するを以てのみ。死若し長
 しなへに歡喜の床に導かむか、誰人か運命の毒矢を忍び、
 苦悶の笞撃に呻吟するものあらむや。必ずや紫電一閃、絶
 滅の淵に沈んで常樂の境に遊ばなむ。君よ此間の消息を如
 何に解し給へりや。飛瀑九天に轟くも遂に傳ふるに由なし。
 と絶叫し、生乎、死乎、大天大地我を容るゝに所なく、山は
 呻き河は咽び、石は悶え草は泣き、苦悶大地を覆て、悲愁法
 界に塞がる。六月四日の夜、清澤先生を思慕するの情止み難

三界悉我有と宣言せられしに非ずや。善きものゝ上にも、
 惡しきものゝ上にも、同じく日をして照らさしめ、雨をして
 降らしめ、明日対りとりらるゝ野の雜草の上にも、等しく慈
 光を垂るるは、全能の神に非ずや。今や三界悉く寂光寶土
 と化し、人類は悉く救れたり。審判の時は去れり。地獄の
 火は消滅せり。救済は無條件なり。絶對他力なり。
 "Thus dost thou harmonise into one all good and evil thin-
 gs, that there should be one everlasting reason of them all!"

—Hym. to Zeus.

華嚴の瀧や今如何に、闇に包める六十丈の瀑布や如何に。
 其瀧壺の底に深く、眼れる操君の魂や、今如何なる郷に
 逍遙ひ、如何なる夢をが結ぶらむ。あはれ絶對の大靈は君
 をして肉体の桎梏を脱して自在の境に逍遙せしめしか。君
 が望める無明の長夜は無限の光明に非りしか。嗚呼自然の
 聖意知るべからず。造化の眞意測るべからず。靈光長しな
 へに君が上にあれ。歸命頂禮、南無阿彌陀佛。

と記載致し居り候。六月十七日に學年試験を終て歸郷致し、
 其後は郷里羽前の山中に獨り沈思に耽り居り申し候。越て二
 十二日嘗て御話申し候故友の夢を見候ひき。其後彼れが母君
 に送れる書簡の一節に、夢中の彼が容貌、談話等を描ける中
 に

(前畧)純白なる小倉の夏服に、球を飾れる薄黄色の靴足袋
 を穿たれ、顔は平生よりは餘程日光に焼け、頬の色のみは
 もとの如くに紅を帯び……

「あゝ君、どしした。まだ生きて居つたのか。今迄何處に居

く、先生東都に在さば直ちに馳せて哀愍を請はむものをとの
 念は燬くが如く、強て精神主義を振り起し候ひて、
 死するものは死せざるべからずして死し。悲しむものは悲
 しまざるべからずして悲しむ。生死固と一體。死するもの
 をして死せしめよ。生るものをして生きしめよ。嘆くもの、
 泣くもの、悲しむものをして、各其の欲する所を追はしめ
 よ。大靈の指導のまに、在るが如くにあり、なるが如く
 にならしめよ。

と記載致して、自ら慰めんと欲し候へ共。到底これ不可能の
 こと、數行を隔て、直ちに、
 悶えながらも、吾人の生息するは、單に死する能はざるが
 爲のみ。

と衷心叫喊の聲を漏らし居り候。我は誠に悶え、苦しみ、嘆
 き申し候。最も堪へ難きは、彼の絶滅と沈淪とに想達せし時
 の苦惱に候。彼は死せず。彼は死せず。否彼は死する能はず。
 決して淪ぶる能はず。十界天地、無限法界、苟しくも佛の實
 在せる限りは、救済の御手のなとて彼の上に及ばざるの理あ
 らむや。彼の眞摯と誠實を以てして、なとて、地獄の猛火に
 燒き亡ぼさるゝの理あらんや。彼の絶滅は我の絶滅よりも辛
 く、彼の沈淪は我の沈淪よりも苦し。一念こゝに至る毎に、
 我心狂ひ、我志碎け、烈風の如く、驟雨の如く、彼は死せ
 ず、彼は亡びず、と幾度となく繰返して、自ら堪へ難きの情
 を慰め申候。六月六日の夜の日記には、

無限絶對の大悲の前には、善なく、惡なく、上なく、下なく、
 無差別平等。悉く救済の御手を下して、一切衆生皆我赤子、

つた。華嚴の瀧の所に字を書いてから、何處に行て居つた。
 「實は飛込ふと思つて、巖頭に立つて眺めると、兩岸の赫き
 所が目につて、熟々眺めて居ると、心が少し動いたので、
 去つて庚申山に行つたのだ。不思議なこともあるものだよ、
 僕は今迄宗教の本などは餘り心を留めて讀むことはなか
 つたが、丁度此時、途て買つた嘆異鈔を讀んで大に得る所が
 あつたので、遂に死ぬことをよして仕舞つたのだ。」あゝ君、
 然りしか。君が庚申山に行きはせぬかと、僕等も語つた
 ことが有つたのだが、一体庚申山の堂に居つたのか、或は
 どこか藪の中にも居つたのか、「いゝや、堂ではな、藪
 の中の大樹の下で本を讀んで居つた。」其靴足袋の珠はど
 うするのだ。「これは弟にやるのだ。」一体君はどして、
 何處から、何時歸つたのだ。「それは何れあとから分る。」と
 微笑まれ……

思へば奇なる哉。不思議なる哉。今日は六月二十二日、操
 君と分れてより正に一月、別れし其日の同じ日の朝五時五
 十五分なりしこと。

嗚呼惜しかりし、惜しかりし、此夢の冀くは現實なれかし。
 よしや現實ならずとも、此夢の今少し長くして、嘆異鈔を
 讀みて得し所と、何時、いかにして、歸り來りしかを聞か
 せなく、夢の間の喜の大なる程、覺ての後の悔しさや
 さす候。

嘆異鈔とは名は知れど、小生の未見の書、操君も多分生前
 御閱讀なかりしかと存じ候。

(中略)それは何れ後から分ることは何時分ることに候か瞬時も早く解らんことを喝望致し候。これを以てこれと思ふ。生死畢竟只其境に於て多少の相違あるのみ。靈と靈との交はる所、此處に實在あり。何ぞ其生と死とを問はむや。肉の交は須臾のみ。靈の交をれ無窮ならむか。

など、之有り候。此日即時に都なる友に嘆異鈔の購求を依頼致し候。越て七月五日前十一時、長く深潭に沈みて、あらはれざりし、亡骸の發見せられたる由の報に接し、終りに一度彼を見んと欲する情奔馬の如く、即刻上京の途に就き申候。嘆異鈔を始めて拜讀せるは此車中にて候。此日雨降り、唯々寂寥の感に打たれ申候。日記に車中の所見を記して、

霖雨濛々として前山雲迷ふ。嘆異鈔を讀む、大人は語り小兒はなく、……山は咽び河は泣く……一本松を過ぐる頃、日はどんよりと暮れて、暮雲山村に迷ふ。蛙鳴く、道芝の露に螢の宿りけり。……

など書き付け申候。空しく白骨と座を共にして、在京週餘、再び故山に起臥致し候。其後は語るに友もなく、誠に廓寥の日を送り申候。其頃都なる友に宛てたる書に當時の我が狀況を叙して、

僕も其後は變りなく暮して居る。今日も太陽は東の山から出たのだらう。僕が起きた頃は蟬が鳴いて居つた。今は午前十時頃だらう。獨り机に座りてぼんやりして居る。空は少し曇りて風が出て來た。前の庭には石竹が澤山咲いて居る。なんと云ふ六ヶ敷名の西洋草も二三種ある。菖蒲や

など、記載致し居り候。父母これを愛へ故、舊我を慰撫す。當時はさまで思はざりしも、後に至りて、これを思へば誠に感謝の外之なく候。

藤村に對する同情も僅かの間に悉く消失せ、やかて罵詈非難の聲は社會の總ての方面より起り候。經世家は社會的打算より、學者は各専門の學理に合せざる所より、宗教家は其教義信條に脊ける所より、悉く鋒鉞をあつめて以て彼を責め申候。或は自殺者の分類表を示すものあり。或は自殺の是非を論ずるものあり。或は彼を呼んで少年哲學者となすものあり。否哲學者に非ずとなすものあり。彼は詩人なりといふものあり。文學者なりと評するものあり。單に精神錯亂者なりと做すものあり。僅か十有八年にして死するは大早計なりと罵るものあり。不忠不考の罪ありとして責むるものあり。はては勝手の捏造説を流言して失戀者なりと貶するものあり。此他聞くにだに堪へざる罵詈嘲笑、其數幾何なるを知らず候。而して此數多き評論中僅かに二三者を除いては、自殺者の心事を洞察して、同情の涙を濺ぎたるは、一も之なく候ひさ。皮相なる哉。淺薄なる哉。滿天滿地、皮相淺薄、よくも盲者の揃ひ居ることよ、人生問題とは人生問題なり。哲學の問題に非ず。文學の問題に非ず。赤裸々の人生に面接して起る、吾人の問題、これ人生問題なり。人間本來の悲哀に觸れて、悶々、苦しみ、これが得脱の方を求むる、これ人生問題なり。これ火を賭るよりも燎々たる三界の大事實。世間の人民是程のことをも感知し得ざるか。懷疑を知らず。悲觀を見ざるは。これ淺薄、卑俗、不眞面目の確證なり。と感じ申し、六月下

芍薬は葉ばかりになりて恨めしげに残りて居る。萬年草は十本ばかり鉢の中に天命を樂んで居る。南天の花は白く、柘榴の花は紅い。石の様な木通は下つて居るが、梅の實は昨日採たから葉ばかりになつた。白い山百合が咲きかけて居る、向ふの方に薊が獄卒の眞似をして居る。杉の木は實に横着物だ。湛然自若、時々風と合奏して雲と舞ふ位で、下界がどうしても不關焉と構へて居る。雲も中々の横着物だ。手も足も無いくせにいつも向ひの山に遊んで居る。吞氣さ加減實に恐れ入る。時には晝の眞中に青空の眞中で、寝て居ることもある。それから一つ横着者が殖えた。寝たい時は寝、起きたい時は起き。機嫌のよい時は庭を掃いたり、芋を堀つたりして居るが、氣が向かないと、飯も食はない、夜も寝ないのだ。而して此横着者共は中々中が善いので、夕方に金星の出る頃には何時でも一所に居る。

然し君よ、これは僕の周圍で僕自身ではない。不可解の爲めに藤村は死んだ。不可解のために僕は死ねない。安じて生くることの出来ない僕は安じて死ぬことも出来ない。(中略)何れも曖昧で眞相などは何處にあるやら、益々疑問深くなるばかりである。深夜一人て考て居ると、自分が一番怪しくなつて來る。學問は自分を見限る爲めにするのではあるまいか。(中略)現實は勿論いやだ。理屈も面白くないので此頃坐禪の眞似を始めた。自分のすること爲すことが氣に入らぬから、暫しの間なりとも自己を忘れて、無念無想に住したならば、多少の苦悶を逃るゝことも出來様かといふ姑息手段である。(下略)

句の日記に、

宗教の爲めに宗教を説き、倫理の説めに倫理を説くは、今の宗教家、道學先生と云ふものなり。吾人は倫理宗教を以て、人生を律せんと欲するものを惡む。釋尊は宗教を説かざりき。基督は倫理を説かざりき。彼等の訓へし所は人生問題の解決其のもののみ。こゝを以て彼等の教に生命あり。宜なり、今の學者其云ふ所、賢げなるにも拘はらず、乾燥にして無趣味なるや。吾人は人世問題の解決を興ふる患者の出現せんことを望む。

釋迦と耶蘇とは馬鹿の骨頂なり。然れども此馬鹿なかりせば、我何處にか適歸せん。

と痛語致し候。蓋し馬鹿とは利害以上、打算以上、斷々乎として心靈の叫に殉ずるもの、謂に候。更に語を繼ぎて、飽くまでも偽善をなし。知るを知らずとなし。知らざるを知れりとなし。形式を墨守して、奴隸の如くに服従し。主義なく、自己なく、石地蔵の如きは、世の謂はゆる「よき人」なり。

と激罵致し申し候。此間最も我が情を激せしめたるは、藤村失戀説の捏造に候。彼れの死因が果して失戀なりとするも、彼の眞價に寸毫の變化を興ふこと之なしと考候へ共、何分にも、あれもなき事物を勝手に結合して、故友を嘲笑するが癖にさはり、辯駁書も二三度書きかけ候へ共、又々思ひ返して、眞は長しへに眞なり。唯識者のみこれを知ることを得。眞は常に眞なり。されど愚者はこれを見ることを得ず。彼が死因の眞相も亦然り。これを洞察し得るものは、吾を俟たず

して、既に洞察し得しならむ。失戀に非んば自殺する能はずと思惟せる俗物、出来る限り他人を殘賊せんと務むる奸物も之なく候へば、愚俗と共に争はんは迂愚の極と考へ、其後は全く筆とること之なく候ひき。後に至りてこれを聞けば、此は某學校生徒の惡戯にして、菊松女墓事件と松の縁に結び付けられたる、菊地文相の令嬢は、松子に非ずして、たみ子なることも知り申候。

當時世の識者、吾人青年を警めて曰く。人世問題とは到底解決し得らるべきものに非ず。人は唯如何にして此世に所すべしかを探求すれば足る。人生問題の如き不健全なる思想は宜しく削除せざるべからずと。されど我等が人生問題とは、自ら好んで假設の問題を提出せるに非ず、而に止むを得ざるに出でたるものにて、全く我の必然的要求に候へば、其解釋の如何は全く生死の關する所、轉輾憂悶、色身を賭して戦ふは全く此故に候。知識を満たさんと欲するのみの哲學的問題にも非ず。欲求を満さんと欲するのみの激昂せる感情の問題にも非ず。人間本來の全人的要求の發露せるものに御座候へば、一切の假定を捨て、絶對安立の盤石を得るに非ずんば、取るべきの道は只死あるのみに候。人生既に價値なし。何を要めて苦悶の生涯を持續せざるべからざるか、生さんが爲めに生き。生きて而して苦しむ。何等の無意義ぞ。日夜目的なきの方策を講じて、營々勞苦するは決して堪へ得ざる所。自殺者は斯くの如くにして、天地を呪詛し、宇宙を碎き、笑て永劫の闇に入らむとする、またやむを得ざる所に候。仁義忠孝、

學生の藤村なり、其死は美の操君なり。此に別人あつて存す。論者拘々として妄りに理解すること莫れ。

煩悶は、新生命の發芽に伴なへる熱の如く、懷疑は旭日の上らん前の夜に似たり。これあるを以て直ちに悲しとする勿れ。見よ戦は平和の爲に戦かふものなれば、之に打死するものは、義の爲めの死者なり。後の平和に勳功ありとなして、慰めずむばあるべからず。懷疑煩悶の半ばに身を殺すものある、惜しむべしと雖も、人心平和の克復に戦死せしものとして些か慰さむるを要す。但徒らに録言せんは、死者の志にもあらず、又遺族の務にもあらざるべし。

九旬の休暇盡きて、九月半ばに再び上京致し候。喧雜なる奇宿を去りて、田端の農家に寢寢の生活を營み、思ふが儘に冥想に耽り申候。新聞雜誌并びに新刊物は、殆んど一切目に觸れ申さず候。淺薄の言議、固より讀むに價なしと感じたれば候。机上にはバイブル、嘆異鈔、ミルトン、ダンテ、等の數冊のみに候。次第に秋深く、蕭條、寂寥の候と相成り候につれて、悲觀も益々昂進致し。人間のことも意に滿たず。自殺者のみ羨ましく、ダンテ、ミルトンの地獄を愛誦し、星なき月なき、黒雲の覆る夜半は最も適意の時に候ひき。一も非なり。二も非なり。昨も非なり。今も非なり。空の空なる哉。空の空なる哉。一切世間、悉く空なり。日夜營々として何をか求むる。智慧や、財寶や、畢竟何の價値を有する。人生風の如く、露の如し。何故に我は生れしや。何故に我は死にて生れざりしや。何故に我は生れて死なざりしや。光明は長へに我を去れり。暗黒四方に塞かれり。夜深くして獨り

社會の義務、等閑より所世の要針。されどこれ生を欲して、世に所せむと欲するものに始めて價値あり。一切を否定せる自殺者に取て、自らの否定せる無限法界の粟粒にも似たらむ人生の一小部分を構成する國民社會の道德倫理、實にゼロの價をも有せざるにて候。倫理と道德と、所世の方策とは請ふ人世生存の價値を認めたる後に聽かむ、とは自殺者の心事ならむと信じ候、斯かる次第に候へば讀むもの、悉く皮相淺薄、我等が原的要求を滿し、我等が瘡痍を癒やすに足るもの候はず、何れも、見當違ひ、方角違ひの議論のみに候て、自殺者の心事を汲まず、客觀的觀察の下に、拘々として理解せんと欲する論のみ多く之有り候ひき。さは云へ、我は決して自殺者を賞揚するの言のみを聞かむと欲するに非ず、唯其衷情を洞察したる公平の批判を聞かんと欲するもの切なるにて候ひき。而して我は最も感謝を以て巖本善治先生の隨感二篇を讀み申し候、其の甚深の洞觀と、公平の批判とは又他に比類を見ず候へば、左に其文を抄出致し候。

華嚴、般若、方等、夫れ、瀑布之美あり。古人これに觀じて聖經之趣を示せしに、今や一青年、迷執に追はれて、此所に來り、萬丈落下の偉に打たれて、恍惚として忘る。則ち樹皮を削りて巖頭の感を書する時や、既に昨の我にはあらざりし也。斯くの如くにして亦眺め、萋々奈落の音に聞く。斯くの如くにして亦眺め、水走らず、我起たず、飛ばず、死せざるの無我に入る。彼や斯くの如くにして水に投ぜり。亦何の死と何の煩悶とあらむや。西行歌て曰く、願くは花の下にて春死なむ、其ささらぎの望月の頃と。蓋し懷疑は

思に耽れば、寂寥靜かに襲來りて、沈々身に逼り。遠く、チエルベルスの遠吠を聞くが如く、眼前に焰の海、炎の塔の現はれたるが如く、何所よりともなく、悲鳴叫喚の聞ゆる如く感じ。何とはなしに地獄の境の望ましく。或は大魔王が雲霞の如き魔軍を率ゐ、焰を踏て天を睥むを想見しては、我も魔界の眷族たらんことを熱望し、或は黒雲低くたなびきて、風物凄き夜半には、願くは此闇の永遠に續きて、且の來ること無からむを欲し、或は板橋あたり火事の起りて黒焰天を燦ける闇夜には、最終審判の近きて、天地壊滅の來らむことを望みしことも候ひき。當時最も愛誦致し候は、ダンテの地獄圖の銘と、失樂園の一節なる。

“At once, as far as Angels ken, he views

The dismal situation waste and wild.

A dungeon horrible, on all sides round,

As one great furnace flamed; yet from those flames

No light, but rather darkness visible

Served only discover sights of woe,

Regions of sorrow, doleful shades, where penance

And rest never dwell, hope never comes

That comes to all, but torture without end

Still urges, and a fiery deluge, fed

With ever-burning sulphur unconsumed.”

とに候ひき。

かゝる悲境に沈淪致し居り候し時にも、藤村を思ふ時は常に慰安を感じ、彼が寫眞に對し、彼が墳墓に詣づる折は、寂寥

何處ともなく消散致し候。又は彼が母君を訪ひて、なにくれとなく物語り、弟妹と無邪氣に遊ぶ折には、春風吹て、積雪一時に融け去るの感之有り、又は時々相知れる友と語りて多大の慰籍を得たることも之有り候ひさ。

此年も暮れて、三十七年と相成り、我は次第に沈滞の状に陥り申候、二月故ありて田端を去り、西片町に轉宿致し候、徳風會の座談夜會の折に、偶然參上致し、藤村の談より悉く胸中を告白致し、其深の同情と、懇切の訓戒を辱せしは、三月初旬のこと、記憶致し居り候。其節頂戴致せし信仰の餘瀝、信仰問題は、其後時々拜誦致し候。

越て五月五日の朝、窓明け放ちて、彌陀經を讀致し、復次に舍利弗よ。彼の國には常に種々の奇妙なる雜色の鳥有り。白鷓孔雀鸚鵡舍陵迦利頻伽、其命の鳥なり。是の諸の鳥、晝夜六時に、和雅の音を出す。其音五根五力七菩提分、八聖道分、是の如き等の法を演暢す、其土の衆生、是音を聞き已て、皆な佛を念じ、法を念じ、僧を念す。舍利弗よ。汝此鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふ勿れ。所以はいかん。彼佛國土には三惡趣なし。舍利弗よ。彼の佛の國土には、尙ほ三惡趣の名もなし。いかに況んや實あらむや、是の諸の鳥は皆是れ阿彌陀佛の法音を宣流せしめむと欲して、變化して作す所なり。彼の佛の國土には微風吹て。諸の寶行樹寶羅網を動かして、微妙の音を出す。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如し。是の音をきくもの皆自然に念佛念法念僧の心を生ず。舍利弗よ。其の佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

始めて光明を認めたる時人に送る書

拜啓

寒氣甚だしく相成候處御健勝之段奉賀候。其後は久々御無音に打過候何卒御宥恕願上候、偕一昨日は誠に飛んだ惡戯を致し嘸御喫驚之事と存候、實は何より記して宜しきや萬感交到りて堪えず候、定めし秩序も無之事と存候へ共御推讀願上候。

御承知之通り去る十一日近角師華燭の典を擧げられ、越て十三日夜我々舎生に對し披露の宴あり、甚だ盛會に候ひさ。其れより翌々十五日のことに候、舎内には近來續々獲信の機運熟し、頃來殊に歡天喜地に堪えざる人あり、佐々木哲郎君と申候、此人其夜先生を其新宅に訪れ候處先生の發議にて、從來舎内にありて吾人と共に寢食を共にせしものが、俄に別宅に移りたることなれば定めて寂しさを感ずるならむ、就ては今後一週二回宛先生宅に茶話會を開きて互に師弟の情を温めんとて右の佐々木君誘引せられ候より、其夜俄に先生宅に於て茶話會を開くこと、相成小生も列席致候、然るに初めは種々座談も有之候へ共茶話と雖も先生のことなれば信仰談より外に無之候へば間もなくそれに移り申候處佐々木君はさも愉快げに『先生、兎も角も愉快ですな』と叫ばれ候有様他の見る目も愉快なる程に候へ此間種々事件有之候へ共

と讀むに及んで、莊嚴、崇高の感胸に溢れ、目を擧げてこれと望めば、一天雲なく、薰風徐く動いて、新緑朝輝に映じ、天地清淨の光明に満ちて、乾坤さながら音樂の如くに候ひさ。此を望んで、我は自然に念佛、念法、念僧の心を生じ。至心信樂、踊躍歡喜、大靈の光を拜して、復活致し申し候。近角先生足下。一度は天地を呪咀して、魔軍に投せむと欲せしまでに墮落致せし、煩惱の塊、罪惡の首が、有難や、攝取の光明に照されて、大光の攝護に與かること、誠に、神變不思議の奇蹟に候はずや。濁惡不善、罪業深重の我身、一朝にして地獄を脱し、如來の愛兒と、相成り申候こと、遍に、無限矜哀大慈大悲の引接と深く、感激致し申候。

其後は人世の局面一變致し、隨所隨時に喜を見出し申候て、時々は反て俗化せるにはあらずやと自ら疑ふことも毎度此有り候て、眞の修養はこれよりと感じ申し、常に念佛祈念怠らざる様に心懸け居り申候。

無縁の慈を以て諸の衆生を攝す。 觀無量壽經。
重きを負へるものは我に來れ。 キリスト。
明治三十八年一月二十五日 藤原正
近角先生机下

あまりくだくしければ要點のみを摘記致候、然るに波岡君と申す大學三年の人近來罪惡觀を起し居られ候由にて、頻りに苦惱に堪えざる有様に候、今人々の愉快げなるを見て遂に座に堪えず『うるさくて、堪まりませぬから失敬します！』とて席を蹴つて荒々しく障子を閉て走り去られ候、先生は甚だ憂慮の色あり、眉を顰めて我等に歸舎の後慰諭せむとを命ぜられ、進んで談話に入り申候、其れより先生苦悶當時の日記を取出して一々説明あり、御承知の通先生の苦悶は非常なるものにて中には

『汝は自殺するにあらざれば破天荒の事をなすべし』

とまで自ら記し有之候、小生はつくづく感ずる處あり、自白せざる能はざる様思はれ、過日某々等列席の砌、罪惡を觀せざるは宗教にあらずとまで、自ら述べたれども實際平氣に内心を顧みれば殊にこれを思ふことなきにあらざれども永續せず、即ち虛心平氣に省みれば罪惡が我が身にありとは觀じ居らずと告白候處、先生曰く『これある哉、過日列席の某氏も君が彼の言を吐きたれども、君が宗教に入れるや否や甚だ疑ありと其後余に語られたり』と此に至りては小生撫然たらざる能はず、恥づる心あり、嫉む心あり、名狀致し難く候、然るに間もなく先の波岡君あはたしく戸を開いて入り來り『佛間に入りて獨り、バイブルを讀む分らず、次で假名聖教を讀む、讀て歎異抄に到る、章毎に胸に當る、先生會て云ふ、同抄は第二章最も難有し』と果して然り、而も第三章に至る亦難有し、四章に到る難有し、五章に到る難有し六章に到る難有し、七章、八章、九章、十章皆々難有し』と先生低聲僅に嘆じ

て曰く『今日まで毎朝卿等一同佛前て歎異抄を輪讀して居たのにな……』と感に堪えず聲低クス／＼と泣聲を漏らさる波岡君亦堪えず聲を擧げて泣く、此時小生亦堪えず、其何の理由なるやを知らず聲を放つて慟哭し遂に伏して絶え入る許の聲を擧げ候、此時の感は後より考へ候へば先生の嘆聲泣聲は地獄の惡鬼が巨口を開いて『今や藤井竟が眞逆様に墮し來れり、快哉々々』と呵々絶笑するもの、如し此に至りて小生坐に堪ゆるあたはず、直に至りて同じく佛前に至り、燈を掲げて歎異抄を讀む、同抄は御承知の如く歡喜に充ちたるものなれど眞實の處其時は左程感じ申さず候ひき、依りて友人の室に走りて無量壽經を得來り五惡段を拜讀す、此時適切に財を貪り色に溺れ憤を結ぶ我が身なることを教へられ候、されど尙ほ文字難解なるもの有之、一と先づ先生の許に先の失体を謝す、先生夫人と共に兩戸を開いて曰く『足下の泣いたるは確に偉大の力に觸れたるなり』と。あゝ此時此語なかりせば小生は確に永く／＼苦悶に沈みて浮ぶ瀬もなかりしものならむものを、此一語ありてこそ先生は小生が爲めの善知識にて候、而して實は此一語こそ小生の聞得したる佛陀招喚の勅命に候こと後に思ひ合はされ申候。時は一時頃に候、其れより室に歸り再び道友の寝ねたるを起して『信仰之餘瀝』を借り、机に向ひて讀む、第一章。宗教的同朋、世の人の人を恨むは自ら善意を以てせず、惡意を以て見ればなり、試みに誠心を以て人に對せよ、必らずこれに異なるものあらむ、而して尙人の改むることなくば尙汝の誠心足らざればなりとこれなり／＼、小生實は從來世を恨み居候、幼にして母を失ふ

父は久しく山務に従いて家に在らざると多年、小生のひがみ根性。此時に始まり申候、爾來世に立ち交りて人に接すると多きに從ひて、人を嫉み、人を疑ふ心愈甚だしく、友の顔を見て暫らくも正視する能はず、忽ちに視線を一轉することさへあるに至り候、加之辱知諸兄は御承知のこと、存候今夏以來人の同情なきこと何事ぞや、甲に頼る、甲助けず、乙に行く、乙顧みず、偶々我が言に耳を傾くるものあるも己れの利害に及ぶあらば忽ちにして他家の事の如し、あゝ今日まで小生の胸中只々御推察願上候、然るに今宗教的自覺の地に到れば彼の憤恨、此の不平、一として我れ自らを顧みずしてなしたるものにあらざるはなし、心にもなくてなせる親友の言動をも疑ひ恨めるにて候、今は何事も露骨に自狀致し候、家人は凡て恨み居候、松尾君も申し憎けれども恨み居候、家弟をも疑ひ居候、如此して瀛車七條驛を發せむとして一聲氣笛鳴ると共に叫哭したるものに候、如此して辱知諸氏と音信を絶たむとしたるにて候、然し乍ら法兄に對しては時に疑へることも有之候へ共、聽講のことも有之何となく尊く感じ居候、依て先づ法兄に御報告申候次第に有之候、近角師に至りては早くより尊く思ひ居候へ共入舍以來近きに慍る、故か、幾分か其思ひ感じ居候へ共尙師の實驗的信仰に就ては疑ひなかりしに至幸の因縁と相成候、

後たり、之れ亦小生に反響していよ／＼慟哭せしめ勤行の終まで泣き伏し居候有様同人諸君には如何に醜く見ゆ申候ひしか、勤行終りて先生は余が手を取りて強く握られ候、あゝ其手より手に移れるものは何物に候ひしか、先生余に爾後奮て宗教の家に生れたる實を擧げむとを勤められ候へ共小生は只惡かつた／＼と絶叫するのみ（此事昨日日曜講話にも小生の名を現はさず次第を逐て述べられ候處此に至りて又々衆人中に慟哭を演じ失體を極め候、然し泣くは善いか悪いか知らねども小生には泣癖ありと見做されたく餘りにこれが爲めに買ひ被られむと耻かしく存候、尤もこれは未信の人に對しての候、然し從來毎週講話有之候へ共昨日程聽衆を感ぜしめたる無之由偉大なる力は何處まで及ぼすかと不思議の外無之候）されど此時は左程歡喜心は起らず候處、頃日歌舞伎座にて越路太夫の淨瑠璃有之、誘ふ道友ありて小生甚だすまぬ心致候へ共勸めにまかせ萬一を慮り、手には珠數をかけ、懷中には嘆異鈔と信仰の餘瀝とを入れ大に武裝したつものにて趣き候處電車に乗りて走る間歡喜云ふ可らず、其の何の故たるを知らず、只心浮き／＼して抑へむと欲して抑ゆる能はず道友に告げて僅に満足致し居候へ共尙ほ誰れかに開陳したき心やまず、乃ち電車を降りて不取敢只嬉しいとのみ申上げたる次第に候、法兄の心には如何御感じ有之候や、其れより歌舞伎座に入り淨瑠璃を聞く、小生は餘り從來聞いたることもなく且つ其文句も知らず、又淨瑠璃なるもの、實際の趣味を解せず（解せざるものを解せる如き顔したが是亦從來の罪に候）自然語れる淨瑠璃が耳へは入られず、ともすれば想ひは

他にのみ走り申候て歡喜の心は愈言ふ可らず、此時の喜ばしさ加減はそれより小生の慣用語と相成候即ち蒼天に脚を踏て倒様に歩むが如く、又は輕氣球に乗じて高く／＼雲の上に昇る思ひ致し候、かうなれば續々として平素教へられたる事共一々生きて來り、我れは已に偉大の力に觸れたり、我れは光明の中に接取せられたり、蓮如上人の國に一人か郡に一人と云ふは我輩が占領したるなり、我等は妙好人なり、希有最勝人なり、我等は即ち佛の親友なり、親子兄弟一家親族朋友の中に於て我こそ往生極樂の先驅をなすものぞ、かうなつてはもう堪まらず、淨瑠璃などが越路だとして攝津大塚だとして耳に入るものか、もう歸つて先生に聞いて貰はうとまで存じ候、又歸途の喜びは益々甚だしく幾度思ひ返して見ても嬉しいものはやつぱり嬉しく否此時は嬉しいと云ふより寧ろ難有いと云ふが眞の形容に適し候様被存候、電車の中にありながら、笑はずには居られず、獨り隅の方に立ちながら頻りとニコ／＼微笑をもらし居候、歸れば十二時頃に候、先生の宅よりとて餅菓子四個宛頒たる、小供臭く候へ共かゝるとまでが嬉しく、あゝ何處まで嬉しいのかホントに瓢箪たゝいて念佛の柏子に踊りまはり度心地は抑へされず候、然し従前とても多少喜ばれしともなきにあらざり、されど今より回想するに全く根底なき歡びに候、心底よりにては無之、其證據には一夜寝て起れば昨は何故あの様に喜ばれしか却て不思議な程に候ひき、此度もかゝるものになきやひろかに恐れ居候處、昨朝起き出候へば眼を開けるなり矢張嬉しく候事又々嬉しく候、加之不思議にも前夜は夢にまで何物か告ぐるものあるを聞き

止め候、其は實の處前日にはこれよりは内剛にして外柔なるべく努めむとの心有之候處夢の訓には善くするも悪くするも思ふ様に計へ、剛に装ふも柔に装ふも自然にまかせよとの事に候、其れより見聞一として従前の意味を變ぜざるものなし、此に至りては歎異抄は我喜びを十分に表はしたるものにして信仰の餘瀝は尙ほ淺く思はれ候、其後見聞に就けて實験候事頻々たるものに候へ共餘りに長く省き候、就ては未だ信仰に入らざる人は殊の外氣の毒なる心地致候間此狀を以て一々家人辱知諸氏諸友人家弟等に御示し被下度乍御迷惑吳々も御願申上候、若し小生の心付かざりし點に同じく心付かぬ人あらば、實験上十分に御示申す事出來候様思はれ候、尙小生は御承知之通久しく神經を痛め候爲其故に非ざるやを若し疑ふ人あらば誠氣の毒に存候、神經が如何にあるとも喜びは事實に候、此丈の喜びあらば假令充血して即死するも十分満足に候、未來は地獄なりとも満足に候（地獄ならぬことは確に候へ共）又今日とても左程喜ばれざることも有之候へ共内心を顧みれば何物か我が心を攫み居候、未來に一步を踏み出して考ふれば明らかに光明に候、我が心中には常に一種の力を感下居候、此感じだにあらば喜びはあるともなくとも十分に候、思へば不思議なるものにて此味は従前預想せし處に大に面目を異にし候、如何なる人を見ても決して輕侮の念起らず、見聞に依りて妄念を起すとは現今とても有之候へ共直に佛陀を思ひ浮べ候、佛陀を思ひ浮べ候へば直に雲霧消致し候、今日の心は一個の寺の住職にして數百の壇徒を率ゆるとは思はれず、全く念佛の一行者愚夫愚婦と異なる處些

も無之候、成程小生は狂氣の如く見ゆべく候、曾て渡邊知空君が信仰に入られたる時の狀を聞き全く當時は發狂せしものと思ひ居候處、昨日會見致し其狀を聞き狂ならぬこと知られ申候、否、狂と云ふべく候、實際私の本氣でなければ狂とも云ひ得べきことと存候、されど小生は渡邊君の如く人に狂と見らるゝ程のこと行動に現はれず、或は喜びが足らざるものか、然し一昨夜の喜びは天下に小生程喜びを有するもの無之候と存候、小生が突前の喜びなることは申すまでも無之候、あゝ實験なる哉、實験の價値始めて解し得候、實験なき人は不幸に候、實験なくして喜ぶとは全く僞に候、假令事實とするも小生と同じく根底なし、心底よりの喜びにあらざることも内心を自省すれば判然たるべく候、就ては先般御講述の歎異鈔講活は未だ出版無之候哉、稿本御手許に有之候はゞ至急拜借願度候、甚だ冗長なること申上拜謝候、小生はかゝる冗長なる書翰を認めたるは生來初めて候、以て心中御推察願上候、右御依頼申上候事共是非懇願致候、我が身が正定聚に住するを得ば喜ぶべきとは今迄存居候へ共現に今實際正定聚の人なりと思ひ至れば大なるアラウドを感じ候、尙以後時々御教訓に預り度又實験候事は御報告可申上候、治丸殿へは不思議に例の不平を書き列ねて述べたる事十五日近角師宅の茶話會に出席する前のことに候、翌朝は心機一轉し此書は改むべきやと存候へ共わざと差出し候方回想の料ともなり面白かるべしと郵送致し置き候、孰れ小生よりも該一轉の快報告可致候へ共略々法兄より御傳聲の程奉願上候、

百目木氏の『信仰生活』愈々開版本日一部貰ひ受け候、中に

蓮師の

罪ふかく如來を頼む身になれば

法の力に西へこと行け

の御歌有之候、「罪ふかく」は今まで「罪ふかさ身にして」の意と存居候處只今これは然らずして「罪ふかく」は「なれば」にかゝること、存候、「罪ふかくなる」とは即ち自覺するなり、罪深き我が身が知らるゝ心になるなりと實験致候、如何に候や、一々書き止め候はゞ限り無之候、惜しき筆を擱き候、此書は何かの紀念にもなるべき時なしとも料られず候へば御殘し置き被下候はゞ幸甚

十二月十九日

求道學舎にて

藤井 竟

大須賀道兄侍史

最も要領を得たるの

信仰

塚本君は昨年求道のため、歴々九州より一年間の暇を得て上京されし人である、随分不幸な境遇の人で、家兄は精神病で一族心配して居られる、同君は小學に奉職して居られたが、極乏しき旅費にて知合を辿り嵐山に、石山に、佳景を賞しつゝ東京に來られた、初めて來られた時東京に宿すべき適當な所を見出されぬ位であつた、有縁に言へば同君ほど要領を得な人だ人はなかつた、哲學の理窟を云ひ、又天然の風景に對して非常な崇富の念を起し、又小供等に對して非

常に愛を有するなど皆同君の信仰告白であつた、最も可笑かりしは同君の英雄崇拜の性質で、同君は補正成と云ふことが頭腦の中心となつてあつた、夫から現時の人は福島少將を非常に慕ふて、其家に書生として入込まむと欲して參謀本部に度々通はれた、又八代大佐の事をききて一時は軍艦に乗り込みたいとて是も熱心に求めんとせられた、又忽にして廣瀬中佐を崇拜す、かく最も要領を得ぬことを云ふてありたが今では最も要領を得たる人となられた、其動機は下の如くであつた、全体此人は何事も喜びて居る性質故、人を惡しく見ることも出来ぬ、且つ何時も訪問して要領を得ぬことを並へ立て、歸る人であつた故に有縁に言へば此人と面會することさへうろさくなつた、故に私は隨分此人を冷徹に取扱ひ、此人の言ふ事を枉けたことが多かつた、夫にも拘はらず夏の炎天に脚氣の足をひきて辛拷強く訪問された、其間少しも不服な氣色の見へぬには聊か感心して、熱心に信仰を説きた、然るに或日の事、此人の性質にも似合はず、此人の寄寓して居る家の冷かなることを私にかこられた、其時私が力を入れてアナタは人物崇拜で安心をしやうと心掛けていられても人間にたよりにて安心など得らるべきではない、實に自覺すべきは此時であると云ふて佛陀の御慈悲を喜ばして貰ふた、其歸路は全く念佛して無上の喜であつた、其後昨年

拜啓

旅順の都降伏は、彼此、此世からなる修羅の苦をまぬかれ、これ程目出度ことは御座なく候。小子は、一日の目出度ことは、これまでも多く知らず候處、今年の一日は、眞に、目出度ことにて、如來の御喜び如何計りならむと存じ居り候。戰爭場裡に、人生の最大悲苦を觀じながら、是ても、如來の御慈悲があもひ出されぬとは、遺憾の極に候。普照無邊の無碍光に候へば、小子の氣遣ひ要らぬことながら、矢張氣遣致し候。

是一に、彌陀如來の氣遣かさせて下さるのだらうと存じ候。さもなくば、小子は小慈小悲もなきもの、心は蛇蝎のごときもの、無慚無愧のものに候へども、到底も氣遣道理は御座なく候。若し、彌陀の御廻向なかりせば、大悲の誓願聞くことなかりせば、此人生を如何に爲む、世の悲惨、苦患を觀るにつけ、悲しき中に愈々彌陀の恩徳の宏大無邊なるをよろこばれ候。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、今朝和讃拜誦、獨り御慈悲を喜ばせてもらひ候。和讃は「願力無窮にまじせば、罪業深重もあからず、佛智無邊にまじせば、散亂放逸もすてられず」「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障ちもしとなげかざれ」「本願聞頓一乗は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提体無二と、すみやかにとくさとらしむ」「萬行諸善の小路より、本願一實の大道に、歸入しぬれば涅槃の、さとりはずなほちひらくなり」「信心よろこぶそのひとを、如來とひとしとときたまふ、大信心は佛性なり、佛性すなほち如來なり」「超世の悲願き、しより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ」等、最もうれしく拜誦致し居り候處、大阪より尾の道へ航行中、「本願海の中には、智愚の波こそなかりけれ、弘誓の船に乗りぬれば、大悲の風に任せたり」をよみ、是れ、是れより外に何も無い、大悲の風に任せたり、いや、任せにや居られぬ、此方は何事も知らぬ、あゝうれし、あゝ心安し、此位ありがたい和讃はないと感じ候。其後は、岡ゆる度毎に、此和讃を讀ませてもらひ候。如何なる黒雲も、如何なる障害物も、此大悲の風には直ちに吹拂はれ候。何卒御

喜び下されたく候。大悲の風にふかれ、超日月光を仰ぐ時、私の心御推察下されたく候。尾の道の淨泉寺、室津の成滿寺（共に本派）にて、宗祖の報恩講執行中に會ひ、佛を信ずるでない、仰ぐでない、慕ふでない、抱きつくでないが、信ぜずにや居られぬ、仰がずにや居られぬ、抱き着かずには居られぬことを、參詣者に告げ候。是、一に、親鸞聖人の御はからひと存じ候。廣島にて、大手町桑門仙巖師を訪ふ際、不案内の土地とて、反對の方向へ行く中、よく尋づね見んものと一老人に道をとひ候處、自分は大手前方面へ行くゆゑ、連れ立ちて來られよとの老人の言葉にしたがひ、伴ひ行く道すがら、小子の身の上告げし後、此の地の信仰家は誰なるやとひ候處、老人大によろこび、道に、佛恩の無極を共に喜び候。是を初縁として、翌日再度會して、數時間法話に心を慰さめ候。此老人誠にありがたき信者にて小子も大に感じ候。斯かる得がたき信者に不圖出會いたし候ひしは、是一に彌陀佛の御はからひに候。此老人の話に、當所にて天野義右衛門氏は、稀有の同行なりとき、翌々日天野氏を訪問、法話いたし候。同氏は穢多の種族に候へども、佛陀の光をうけて、心は淨多に候。小子の如き身は半民でも、心は穢多なるをあもへば、ほんに耻かしく候。人間もし、大悲の風に晒らざれば、身は華族でも心は何時迄も穢多にて終らむものを、然るに大悲照らしたまへばこそ、この穢多が華族どころか、清淨無垢、大慈大悲の佛になられるとは、何とうれしいありがたいことに候はずや。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、委細の事は後便に申上べく候、先は旅中の所感の一部、告白まで如此に御座候。謹言

一月十一日 塚本大愚

嘆 咏

我が母に

迷ひ狂ひて、一たびは
母上捨てつ、我はしも
ゆきて世界の果をさへ
きはめ見むとは、思ひにき、
めで、擁かむ「愛」もやと。

八

風

ちまたく、に其をもとめ、
戸毎戸毎に手をのべて、
「愛」求むれど、いたづらに、
嘲る人の、冷けき、
憎をうくる外なくて。
いよ、迷ひぬ「愛」の爲、
いよ、迷へど「愛」の爲、
其の「愛」つひに求め得て、
惱み悶えつ、我か家へと
歸り來りぬ、空しくて。

さるを今かく母上は
出で、この我むかへます、
あはれ、其の目にきらめける
光ぞ、ながくもとめてし
厚き情のそれなりし。
(ハイネ)

白

佛

世の煩ひのことをへて
夜ぶかみ、しばし歌思ふ。
佛のみ恵み、うたふこは
あまりによわき吾なれど、
えたえざらめや、み姿の
ありく、空に見え玉ふ。

心のまゝを

甲

之

人の事を偽りといふわれが身を、かへりみすれば
偽りのわれ。
偽りのわれをもすてぬ御佛の、慈悲はあもへど愛
はやまず。
吾が愛あしたの露とけたまくと、君とほとけを語
るを願ふ。
われが身をかへり見すればつみ深かき、我をすて
ざるみ佛かなし。

うつそみの命のかぎりみ佛を、忘れずあらむされどかなしき。
 み佛の慈悲はあもへど鹿子じもの、一人思へば心悲しき。
 み佛を人に説けとも己が身に、ほとけ思はずわれ如何にせむ。
 罪ふかき世にかたくなの我なれど、我に佛の法説きたまへ。

我が力我はからずよふるまへば、憂ぞまさるいやしく〜に。
 みほとけのなさけかしくみ我が心、歌によまむとわれなやみ居り。
 み佛のみのりき、つゝかくばかり、くるしむわれは罪ふかきかな。
 世の笑ひ事もなけども劔太刀、こゝろの憂せむすべもなし。

我が思ひよきもあしきもそのまゝを、人に語らば憂やみなむ。
 世の人の行ひ見れば吾が心、かゆれかくゆれ憂はやまず。
 み佛のみのりき、つゝ悲しきと、人にいはむは苦しきもあり。
 かくばかり嘆きてあれどみほとけは、忘れずありといふと〜いふも。
 我思ひ憂あるごとなきごとく、霧の如しといひて

時 報

昨年の求道學舎日曜講話

求道の機運年一年と加はり、日一日と切實となり來りぬ、昨年中に於ける信仰の勃興頗る著しきもの也、求道學舎に於ける日曜講話は實に説く者、聴く者、一週間に於ける胸中の煩惱を洗ひ盡して、身神悦豫油然として佛陀の慈雨に沐す、而して席に列するもの皆謹嚴眞摯の態度を以て飽まで之を求め、得ずむば止まざらむとす、或者は幾多人世の問題に接觸して煩悶に堪へず、膝を接して道を求め遂に光に遇へるもの其數を知らず、又信仰の餘瀝を體讀して遂に佛陀の慈悲に接したる人亦鮮からず而して、何れも最後に光明を認めたる經過を察するに、皆一々意義の存するものありて、人生は結局皆信仰に達するの經驗たらざるはなし、其甚しきに至りては一夕の信仰談に突爾攝取の光明に接して號泣止む所を知らず、忽ち雷電に打られたるが如く、一座肅然容を改めて大悲の恩徳を感泣することあり、月の終りの信仰談會に於ては常に一點の修飾を用ゐず、各自の實驗を告白して聴くもの亦同化を蒙らざるはなし、昨年中求道學舎信仰談會に出席せられたる人々は次の如し。

近角常観、小河滋次郎、萩野伸三郎、八田三喜、太田秀穂、影山演衛、木村法惠、玉代勢法雲、吉木一期、塚原秀峰、高富士徳成、森信丸、矢部彌太郎、山下汎、鈴木卓苗、今井玉香、無瀬田眞、無瀬田眞一、三井甲之助、田邊治一郎

をやまむ。
 長々し書くともつきし我が罪を、我思ほゆといひてをやまむ。
 我思ひつぐる人なみ禮なしと、思へど君のきかむをねがふ。

紹介

◎佛陀之聖訓

文學士 常盤 大定纂

著者は忠實なる佛典研究者にして、特に近年眼を洋譯の原始佛敎の書籍に瞭せしあり、此の如き緻密なる取調の間の産物として編纂されたるもの也、全篇十章より成立し、心、道徳、精進、忍辱、行誼、佛陀、布施、生死等の題下又若干の細分ありて、此等の徳に關して、主に阿含部の經文中より採萃したるものにして、興味深き譬喩因縁等に關するものを撰びて集めたり、殊にすべて意譯せずして、原文の形を存したるを以て多少文字短しと雖神聖にして嚴かなり、本書固と發賣院幹事安達憲忠氏の依頼に應じて教誨用として纂されたるものなれば監獄等の需要にも頗る適したるもの也、今日世人が佛敎聖典を求むるとき恰好なる書籍なき今日此の如き好著を得たり袖珍にして製本亦可、吾人は著者が多大の勞を謝する者也(定價金參拾五錢)

◎哲學辭典

文學士 朝 永 三十郎著

著者は多年哲學史及哲學を專攻して、其研鑽、精微に入れるの人也、此の如きの人にして此著あり、吾人は此の如き忠實なる書籍の出でたるを喜ぶ、由來我國の著述界たるや一夕考案の餘に出でたるもの多くして、一字一句につきて忠實に思考を費したるもの頗る稀也、元來辭典の如き尤も此性質を帯ぶべき筈なるに間に合せのものと多くして、譯語の標準たるべきものにして、其資格を満足せしむるもの少し、殊に専門辭典の如き之を編するものすら頗る少し、然るに今や著者は如何にも周密なる注意を拂ひ、殊にアイヌレル、キルヒレル等の獨、英の哲學字典を參考し、且倫理學、心理學等特殊の哲學的科學に於て其専門家の説を參考して編纂せられたるもの也、其體裁は各語を獨英佛の三國語を以て記し、其下に精密なる説明を加ふるものにして中には數頁に渉るものあり、殊に希臘羅馬より出でたる語の如き其語原を以て説明し、頗る親切なる著述也(定價金貳圓三拾錢)終りに歐字索引を加へたるが如きは最も重寶也(定價金貳圓三拾錢)

美佐捨治、波岡茂輝、島貫彦次郎、梅原嚴矣、藤枝慶圓、無瀬田秀孝、梅園義亮、三宅しづ、百目木かよ、田中ぬい、服部たい、上關さみ、吉岡清光、茶谷保三郎、外垣秀重、上島港之助、原肱手、安藤州一、佐々木月樵、百目木智穂、藤川慶造、徳納郡米治、金谷宗亮、波佐谷啓發、大西成道、岩崎紀博、小野崎とし、宇野はつ、秋月とく、藤谷實惠、阿刀田全造、大草懸逸、佐伯正、葛原運次郎、小野直次郎、野邊保藏、高山繁治、岡田耀賢、島崎愛之助、小野寄雄郎、後藤瑞岩、藤井基圓、若槻道隆、増田甚治郎、山下汎、切山篤太郎、穴澤清次郎、曉島敬、川越七太郎、東海史、原祐次郎、小澤一、渡邊徹去、開谷法龍、西島彌市、吉池清、落合浪、湯川はま、寺井とき、三木文、竹中賢惠、四戸熊藏、元吉順三郎、大館憲章、萩野ふさ、曾我量深、郷古潔、安村行雲、松宮春二、大橋豊丸、中村千代吉、西本法龍、中川惠亮、武藤宗治、福元一二、藤法子英、吉藤貞龍、織田高三郎、柘植富久、中川たま、田中たか、萩野あひ、藤高秀起、山路健之助、宮部均、樋口龍縁、佐々木蕭、金光秀諦、小林那治、鹿嶋徹巖、吉村英治、菅山貞三、弘中兼善、井上莊一郎、木下義徳、山根啓、柳生基史、下耕一、奥田正造、西村直丸、河野能孝、渡邊長法、大原二郎、宮岡教養、前川義雄、松澤泰慶、小島孝吉、種田淳一、山形弘、吉村兼太郎、大勝芳橋、八木佐吉、西村朝喜、吉田たか、松時よし、片柳とし、渡邊知空、龜田多八、相原熊太郎、西島覺了、和才誠司、佐藤浩、島津雲溪、安村曉雲、山下有隣、遠山壽雄、山名了淵、一條八重、大野照石、梅野薫、本間金藏、松原諦二、阿部常次、高橋勘太郎、關しげ、石川ちよ、近藤せい、福永愛惠、永岡よし、中島さよ、齋藤さい、服部さよ、岸野ちか、風尾なつ、馬場はる、川口ちよの、田島末、小澤正隆、小柴晃善、藤田勝三郎、吉田龍馨、小倉了誠、伊藤徳助、伊藤藤一郎、速水宗慶、藤原政五郎、牧虎藏、橋越妙、田中等、立花慈海、瑞穂直、工藤重五郎、上野智徳、長峰訓汁、海野香澤、宅間巖、前田豊八、松澤鼎成、藤井寛、佐々木哲郎、原田龍三、梅田等、吾妻寅藏、森正直細野傳四郎、殿野茂光、東仁松、今井精三、木谷暢、村井清、海原寛照、梅原兼俊、兼地浩、森政、伊藤系平、高橋邦次郎、一宮はる、高坂ひえ、田尻まさ、水野せい、大久保たま、齋藤久、安田文精、近角常音、天野印定、池山榮吉、池山きよ、池山壽天、近角きよ、楊子玉、金波徹視、柏原祐義、本園徳順、武岡義政、大岩道隆、井上勲、海野英俊、三上道賢、鷺津法城、清水さわ、牧野

いさみ、伊藤秀、佐田茂、高松たは、岩井ちとせ、櫻井よしの、常光泰、吉田ちよ、木村まさ、一之戸はる、江部龍圓、平出幹雄、山下成一、佐治秀壽、深川谷助、木山十彰、杉村真一郎、葵英元、

昨年(去年)の女子信仰談話會

毎月第三日曜の午後求道學舎に開く、主として女子高等師範學校女子大學内の人々なり、通常の日曜講話及び談話會にも出席せらるれど、殊に女子の爲めに此會を開くこと、せり、殊に昨年中に於ける信仰問題に對する態度直摯を加へ來りたること頗る著しきものあり、且つ一昨年度講話に出席し、殊に此會にて經驗を重ね、學校を終りて地方に教鞭をとらるゝの人、學窓を出て、社會に出づるに及び、初めて信仰の光輝を認め來りて其偉大なる力を認められたるの人多し、而して此等の人は各地生徒の父兄及地方人士の信頼するもの頗る著しと云ふ、因に昨年中求道學舎女子信仰談話會に出席せられたる人々は左の如し、

川口千よの、悪比壽みよし、馬場はる、宇佐見けい、中島さよ、徳永さだ、赤間よれ、越智英代、上關とみ、岩根みよ、大浦つる、木下きくに、菊池しげ、國本はつみ、服部たへ、池山てつ、須藤えう、安西たけ、關みわ、小川よし、齋藤とめ、原見幸、森岡たか、宮地ますほ、進藤よれ、神田愛、窪井常野、佐田茂、風尾なつ、秋月とく、照井ゆく、常光泰、土方ひさ、田嶋すゑ、富りつ、中田かめき、大野久、鹽川しやう、作間はる、岩田ゆき、堀口君子、服部君代、百目木かよ、原田きみ、松尾さき、才田外世喜、末永しむ、神村つる、中原たま、小野崎とし、吉田たか、河口せい、三宅しづ、松岡さち、新渡戸はつ、江守しづ枝、島岡まさ江、岩井ちとせ、植村富久、丸茂むね、吉田ちよ、一條八重、萩原みち、小嶋よしの、櫻井よしの、伊藤秀、八十嶋いそ子、同みどり、近角きそ、土屋保子、淺田つれ、鈴木きよ、能美喜美、

昨年の第二求道會講話

九段坂の佛教俱樂部に於て毎土曜午後二時より開會する所也、本郷の求道學舎は大學、高等學校、高等師範學校、眞宗大學、哲學館、女子高等師範學校、女子大學等を中心として本郷小石川地方の學生諸氏の來聽せらるゝ也、而して第二求道會は専門學校教友會の發起として催さるゝ所にして専門學校、高等商業學校、神田に於ける諸學校を中心として、其他官吏あり、實業家あり、殊に各種の社會を通じて實際問題に接觸して道を求めらるゝ人來聽して、遂に信仰に入りし人頗る多し、或は多年地方に在りて苦悶し、遂に光に接したる人あり、基督教の學校に在りて苦みて信を獲たる人あり、佛教學校に在りて熱心に求めて得ず苦しみし人の光を見出したるあり、本郷の聽講者は常に人の變化少きに拘はらず、九段の聽講者は常に多少の異化あり、されど偶然結縁の多きは九段の方却て多し、又甚しきに至りては忽然佛陀無限の大悲に接して單に懺悔告白の爲めに來りて流涕慚愧涙席を濕す事あり、昨夏後第一土曜に於て信仰談話會を開くこと本郷求道學舎の如し、

第三求道會開設

從來日本橋區に於て、實業家及其子弟徒弟の爲めに求道會を開かんと欲する志ありしが、本年に入りて同區に於ける熱心なる贊助者西澤善七君の發起により、一月廿八日即第四土曜日晚に於て其第一回を開くこと、なれり、從來宗教家は實

業を重んぜず、又實業家も信仰の基礎に立ちて其業務に従ひ、堪忍不拔、其望を遂行するの風少かりしは頗る遺憾とする所也、本會の如きは其風を養はむが爲めに設くるもの、今後少くも一ヶ月一回を開かんとす、有志諸氏の來聽を望む、第一回の演題左の如し

歐米青年會の起源 近角常觀
佛陀は慈悲の塊也 同

▲日曜講話演題

○十二月二十五日 願力不思議 近角常觀
○一月八日 地獄極樂に就て 曉鳥敏
理想海 近角常觀
○一月十五日 力の宗教 近角常觀
○一月二十二日 信仰の兩面 近角常觀

▲第二求道會講話概要

○十二月三日 即我善親友 此は大經の偽文に見敬得大慶即我善親友とある文より取れり、佛の教を聞きて忘るゝ事なく佛を見て敬ひ大きに慶ぶ者ならは我善き親友なりとの玉へる意なり世間には種々の朋ありと雖も信仰の明程味ある朋はなきなり今は阿闍世王の法を聞きて慶ばれし様子を述べん阿闍世信仰を得られたいはるゝに我若し佛の廣大なる慈悲に遇はざりせば無量無邊阿增祇劫に於て地獄に落ちしなるべし阿闍世又佛の善哉、今汝が信仰を得たる爲にこれより後の惡人は悉く救はるべしとの玉へるを聞きて言て曰く我が爲に一切の惡人が度せらるゝならば我は地獄に落ちるも更に後悔なしと何ぞ其決心の偉大なる正に是佛

の善親友なりといふべし私も此間非常に忙かかしかりし爲に甚しく披勞せしが不圖我は今佛の稱譽にあづかれる身なるをと思ひし時親しく佛に接せし心地して披勞はいつしか去りたり詢に有難きは佛の御慈悲なり此慈光の下に集れる人々こそ眞の朋といふべきなり(信仰之餘瀝第一章參照) 近角常觀

○十二月十七日 自然法爾之意義 大意は前號の社説及び本號の求道學舎信仰回熟の時機に委しければ茲に略す 近角常觀

○十二月廿四日 信心開發 大經に曰く聞其名號信心親喜乃至一念、この文を親覺聖人は解釋して曰く一念とは信樂開發の極速を顯はすなりと開發とはひとおもひなりこは全く實際に非れば味はれぬなり或干卷の經文も實際を以てせされは味へるものに非ず龍樹菩薩は又曰く信心清淨なれば華開いて佛を見奉り信心清淨ならされば華開かずして佛を見奉る事を得ず又親覺聖人は能發一念喜愛心不斷煩惱即涅槃と實に味ふべき言なり是等は個人への信心の開發を説ける文なりと雖も引いては國家の信心開發世界の信心開發をも豫想せらるゝに至るべし。

▲本誌表紙畫

著名なる意匠家工學士武田伍一畫伯か、南都法華寺十一面觀世音の像を本として熱心に意匠を凝らし本誌の爲めに作られし者、茲に謹んで好意を感謝す

梅澤和軒先生校註

武家時代女學叢書

全六冊完結 毎月順次刊行 一冊卅五錢 郵税六錢
六冊 前金一圓九十錢 郵税卅六錢 郵券一割増
▲本書は武家時代の女學に關する書籍を集めて叮嚀に註釋を入れ總ふり假名を附ましたから何人がお讀になつてもよく分ります。

▲殊に時節柄出征軍人家族の慰籍品には最も適當であります
▲修身科の參考書として女學校教師諸君必讀の書で賞品用にも適當であります。
▲將來の良妻賢母たる女學生諸姉が武家時代の家庭の有様を御覽になるには是に優る本は御座いません。

第一編目次(全六冊の内) 既刊

- 庭の訓抄 阿佛尼著 伴崑蹊釋 女訓 佐久間象山
- 乳母の草紙 作者不詳 與味書 吉田松陰
- 艦草 中江藤樹 與新婦書 江川坦庵
- 老が心 上杉鷹山 與妻書 屋代弘賢

發兌元 東京麴町三丁目 森川町一
取次所 東京本郷 求道發行所 有樂社

無盡燈

◎明治三十八年一月一日發行

一部金拾錢
半年五十五錢
一年一圓郵税共
毎月一回一日發行

第十卷第一號要目

- 唯心家の三派 河野法雲 一記者
- 佛敎の發展を論ず 曾我量深 池山榮吉
- 我無我の發展を論ず 中島覺了 信田智見
- 法敬坊の用心 住田智見 風溪
- 道元禪師に就て 諸同人 蘇月
- 爪雪處近稿 南條文雄 枯山
- 妙法蓮華經和譯 南條文雄

發行所 東京東鴨 眞宗大學 無盡燈社

文學士常盤大定纂

佛陀之聖訓

全一冊、クロス、金字入、二百十頁餘、製本、印刷精選

一冊特別減價三十錢 郵税四錢

世人の佛敎に意あるもの簡潔明了なる著の出つる待や久しく其聲や大なり。而も未だ之に應ずるもの甚だ少なきを憾とす。本書は東京市養育院幹事の求により、同院敎海の講本に備へんため留意纂修せるものにして、金言の間に譬喩を交へ、且つ實例を加へたるを以て其趣味深く。殊に懇篤に和譯せられたるを以て、如何な婦女兒童にても了解するに難からず、各種の佛敎團體、婦人敎會、兒童敎誨の講本に適せるは勿論、苟も佛敎の大要を知らむとするものに取りては無上の好著たり。希は一本を坐右に備へ修養に資せられむことを望む。

發行所 東京小石川白 山前町三十一 無我山房
取次所 本郷森川町一 番地 求道發行所

文學士 近角常觀序 (既刊)

信仰生活

袖珍美本 定價貳拾錢 郵税金貳錢

人生は闇なり。迷なり、迷なるゆゑ、そこに悟あり、闇なるゆゑ、そこに光を見るにあらずや。吾等は迷ひつゝ悟る也、悟りつゝ悩むもの也。迷悟もと二あるにあらず、煩惱菩提一なりと知らずや。これ宗教的經驗を経たるものにあらずんば個中の眞味を語るに足らざる也。
『信仰生活』の一篇正さに是也。實驗の土は底深く穿かたれぬ懺悔の泉は清らか也。苟も信仰の渴を醫せむとするもの來りて清泉の流を汲め。

發兌元 東京本郷四丁目五番地 文明堂
賣捌所 東京本郷森川町番一 地 求道發行所

舟橋 水哉編輯 (佛教婦人改名)

月刊 家庭

家庭

價一部六錢

年七十二錢

明治三十八年一月一日發行

◎小泉八雲氏逸話 大谷正信
 ◎親鸞聖人の家庭 前田慧雲
 ◎はるかぜ 堀内新泉
 ◎親鸞聖人の宗教 佐々木月樵
 ◎徳川時代の婦人 吉岡梢風
 ◎親鸞聖人小傳(廿四頁) 住田智見
 ◎新年の家庭 記者
 ◎衛生◎裁縫◎料理◎お伽噺◎考物◎兒童研究◎
 ◎新派和歌評釋◎妾の半生涯を讀む◎佛敎界中唯一家
 ◎庭雜誌なり新年の本誌かいか改良されたかを見
 給へ

第五卷第一號掲載要目

大須賀 秀道著

軍國民の慰安

價三錢

郵稅五

冊迄金

源信小傳

二錢

第一編は南條博士の御傳鈔第五版出来◎第二編は住田擬講の親鸞小傳再版出
 來◎第五編は明春刊行◎製本願美施本として最も適當の小冊子なり◎部數に依て
 割引あり千部以上特待法あり郵券封入御照會ありたし
 發行所 東京東鴨 二二五五二 家庭 社 文賣 明 堂 所

社告

本誌從來發行期日に後れ申譯無之候
 就ては此際一月休刊致し二月一日に
 於て第壹號を發行致し今後漸次毎月
 期日を誤らず必ず發行可致候、而し
 て本年中に於て適當なる時期を見計
 ひ臨時に一冊を發行し、十二冊一巻
 を完結可致候間右御承知被下度候

求道發行所

聖書講義錄

隔月發行 每號菊判 百頁内外

聖書が世界最大の文學にして最高の經典たるは今云ふを待た
 ず基督信徒と求道者は勿論、苟も道徳宗教の事に志あるもの
 は、聖書を座右にせざるもの殆んど之れなきの今日、懐むらく
 は、之が指針となりて其啓導たるもの之を、我等微力を願す
 其欠乏の一部を充さんが爲め同志相謀り茲に本誌を發行す
 其内容の如何は今敢々せず、左の目次により其一斑を理想せ
 らるべし。

明治卅八年一月二十五日第一號發行

基督敎世界社
 發行所 東京本郷蘇川町一 求道學舎
 東京麻布飯倉町 森江書店
 外に雜誌欄には諸大家の聖書研究法、耶蘇の新格言、ハム
 ラバイの法典、日曜學校課程等あり
 定價 一部 金拾八錢外に郵稅貳錢
 (注意) 一年分(八部)八拾八錢外に郵稅貳錢
 大阪中ノ島五丁目

歎異鈔

一冊五錢(郵稅貳錢) 百部以上 割引す照會あれ

發行所 東京本郷蘇川町一 求道學舎
 東京麻布飯倉町 森江書店

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべ
 く、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

| | | | | |
|-----|-----|------|-------|------|
| 一部 | 一ヶ月 | 六ヶ月 | 一年 | 郵稅一冊 |
| 金拾錢 | 金拾錢 | 金六拾錢 | 金壹圓拾錢 | に付五厘 |

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷蘇川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷蘇川町一番地求道發行所」と
 せらるべし

明治三十八年一月三十日印刷
明治三十八年二月一日發行

發行所 東京市本郷區蘇川町一番地 求道發行所 (電話下谷二四三二)

發行兼編輯人 百目木智璉
 印刷人 白土幸力
 大賣捌所 東京市神田區神保町 東京堂
 同 本郷四丁目 文明堂

大慈大悲觀世音
真如一實德如海
面如閻浮檀金色
或爲君后或僧尼
和國教主聖德皇
光明皇后坤德大
愚禿親鸞尼惠信
信越之雪關東野
山嶽峨峨佛開關
靈界冥冥不可測
山間忽落花一輪
慈眼清涼山頭月
攝取不捨念佛者

即是無量壽佛心
本弘誓願難思議
清淨如月又似蓮
三十三身現神力
仁政如天懷遠人
內助經營國分寺
宗風萬歲有源淵
芒鞋竹杖化濁惡
數千萬億群生來
自然法爾義無礙
長江萬里水上浮
悲心普陀落山色
是名人中妙好華

佛心善放大光明
戒雷妙雲灑法雨
莊嚴巍巍垂寶手
爾林到處示遊戲
闍邪顯正宣大乘
玉手賜浴纒一千
六角堂裏五更夢
一生之間能莊嚴
光景復似當年夢
渺兮蒼海之一粟
飄然去來到彼岸
合掌禮拜大悲尊
爲父爲母爲勝友

八萬四千照古今
播山竭海震大地
接引衆生度有緣
修習普賢大士德
憲章千古治斯民
即是薩埵慈悲源
大士畫圖華表前
臨終引導生極樂
七百年後事奇哉
凡小何爲知佛意
人生百年光悠悠
慈光照耀無休息
生彼西方彌陀家

《甲辰夏八月念五日於信州作》